



日本帝國

憲法精義完

代
言
士
星
野
憲
治
代
言
士
有
賀
武
雄

校
閱
佐
藤
佳
三
郎
註
釋

版
權
登
錄

環
翠
堂
發
行

皇宗ノ後裔ニ貽シタマヘル統治ノ洪範ヲ紹述スルニ外ナラス
而シテ朕カ躬ニ逮テ時ト俱ニ舉行スルコトヲ得ルハ洵ニ

皇祖

皇宗及我カ

皇考ノ威靈ニ倚藉スルニ由ラサルハ無シ皇朕レ仰テ

皇祖

皇宗及

皇考ノ神祐ヲ禱リ併セテ朕カ現在及將來ニ臣民ニ率先シ此ノ
憲章ヲ履行シテ愆ヲサラムコトヲ誓フ庶幾クハ
神靈此レヲ鑑ミタマヘ

憲法發布勅語

朕國家ノ隆昌ト臣民ノ慶福トヲ以テ中心ノ欣榮トシ朕カ祖宗
ニ承クルノ大權ニ依リ現在及將來ノ臣民ニ對シ此ノ不磨ノ大
典ヲ宣布ス

惟フニ我カ祖我カ宗ハ我カ臣民祖先ノ協力輔翼ニ倚リ我カ帝
國ヲ肇造シ以テ無窮ニ垂レタリ此レ我カ神聖ナル祖宗ノ威德
ト竝ニ臣民ノ忠賢勇武ニシテ國ヲ愛シ公ニ殉ヒ以テ此ノ光輝
アル國史ノ成跡ヲ貽シタルナリ朕我カ臣民ハ即チ祖宗ノ忠良
ナル臣民ノ子孫ナルヲ回想シ其ノ朕カ意ヲ奉體シ朕カ事ヲ獎
順シ相與ニ和衷協同シ益々我カ帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚シ祖
宗ノ遺業ヲ永久ニ鞏固ナラシムルノ希望ヲ同クシ此ノ負擔ヲ
分ツニ堪フルコトヲ疑ハサルナリ

朕祖宗ノ遺烈ヲ承ケ萬世一系ノ帝位ヲ踐ミ朕ガ親愛スル所ノ
臣民ハ即チ朕カ祖宗ノ惠撫慈養シタマヒシ所ノ臣民ナルヲ念
ヒ其ノ康福ヲ増進シ其ノ懿德良能ヲ發達セシメムコトヲ願ヒ
又其ノ翼贊ニ依リ與ニ俱ニ國家ノ進運ヲ扶持セムコトヲ望ミ
乃チ明治十四年十月十四日ノ詔命ヲ履踐シ茲ニ大憲ヲ制定シ
朕カ率由スル所ヲ示ス朕カ後嗣及臣民及臣民ノ子孫タル者ヲ
シテ永遠ニ循行スル所ヲ知ラシム
國家統治ノ大權ハ朕カ之ヲ祖宗ニ承ケテ之ヲ子孫ニ傳フル所
ナリ朕及朕カ子孫ハ將來此ノ憲法ノ條章ニ循ヒ之ヲ行フコト
ヲ愆ラサルヘシ
朕ハ我カ臣民ノ權利及財産ノ安全ヲ貴重シ及之ヲ保護シ此ノ
憲法及法律ノ範圍内ニ於テ其ノ享有ヲ完全ナラシムヘキコト
ヲ宣言ス

帝國議會ハ明治二十三年ヲ以テ之ヲ召集シ議會開會ノ時テ以テ此ノ憲法ヲシテ有効ナラシムルノ期トスヘシ
 將來若此ノ憲法ノ或ル條章ヲ改定スルノ必要ナル時宜チ凡ルニ至ラハ朕及朕カ繼統ノ子孫ハ發議ノ權ヲ執リ之ヲ議會ニ付シ議會ハ此ノ憲法ニ定メタル要件ニ依リ之ヲ夾議スルノ外朕カ子孫及臣民ハ敢テ之カ紛更ヲ試ミルコトヲ得サルヘシ
 朕カ在廷ノ大臣ハ朕カ爲ニ此ノ憲法ヲ施行スルノ責ニ任スヘク朕カ現在及將來ノ臣民ハ此ノ憲法ニ對シ永遠ニ從順ノ義務ヲ負フヘシ

御名 御璽

明治二十二年三月十一日

內閣總理大臣	伯爵黑田清隆
樞密院議長	伯爵伊藤博文
外務大臣	伯爵大隈重信
海軍大臣	伯爵西鄉從道
農商務大臣	伯爵井上馨
司法大臣	伯爵山田顯義
大藏大臣	伯爵松方正義
兼內務大臣	伯爵大山巖
陸軍大臣	伯爵森有禮
文部大臣	伯爵榎本武揚
遞信大臣	

大日本帝國憲法精義目次

第一章	天皇	自第十一條 至第十七條	一丁
第二章	臣民權利義務	自第十八條 至第三十二條	二十五丁
第三章	帝國議會	自第三十三條 至第五十四條	六十二丁
第四章	國務大臣及樞密顧問	自第五十五條 至第六十五條	八十八丁
第五章	司命	自第六十七條 至第六十一條	九十丁
第六章	會計	自第六十二條 至第七十二條	九十八丁
第七章	補則	自第七十三條 至第七十六條	百十丁

法律第二號

議院法

第一章	帝國議會ノ召集成立及開會	自第一條 至第六條	百十八丁
第二章	議長書記官及經費	自第七條 至第十八條	百十九丁

第三章	議長副議長及議員歳費	第十九條	百二十一丁
第四章	委員	自第二十五條 至第二十五條	百二十二丁
第五章	會議	自第二十六條 至第二十六條	百二十四丁
第六章	停會閉會	自第三十三條 至第三十三條	百二十六丁
第七章	秘密會議	自第三十七條 至第三十七條	百二十七丁
第八章	豫算案ノ議定	自第四十條 至第四十一條	百二十八丁
第九章	國務大臣及政府委員	自第四十二條 至第四十七條	百二十九丁
第十章	質問	自第四十八條 至第五十條	百三十丁
第十一章	上奏及建議	自第五十一條 至第五十二條	百三十一丁
第十二章	兩議院關係	自第五十三條 至第六十一條	同 丁
第十三章	請願	自第六十二條 至第七十一條	百三十四丁
第十四章	議員ト人民及官廳地方議會トノ關係	自七十二條 至七十五條	百三十七丁

第十五章	退職及議員資格ノ異議	自第七十六條 至第八十條	百三十八丁
第十六章	請假辭職及補闕	自第八十一條 至第八十四條	百三十九丁
第十七章	紀律及警察	自第八十五條 至第九十三條	百四十丁
第十八章	懲罰	自第九十四條 至第九十九條	百四十二丁

法律第三號

衆議院議員選舉法

第一章	選舉區畫	自第一條 至第五條	百四十六丁
第二章	選舉人ノ資格	自第六條 至第六條	百四十七丁
第三章	被選人ノ資格	自第七條 至第十三條	百四十八丁
第四章	選舉人及被選人ニ通スル規定	自第十四條 至第十七條	百五十丁
第五章	選舉人名簿	自第十八條 至第二十九條	百五十二丁
第六章	選舉ノ期日及投票所	自第三十條 至第三十三條	百五十七丁

第七章	投票	自第三十四條至第四十五條	百五十八丁
第八章	選舉會	自第四十六條至第五十七條	百六十二丁
第九章	當選人	自第五十八條至第六十五條	百六十六丁
第十章	議員ノ任期及補闕選舉	自第六十六條至第六十八條	百六十八丁
第十一章	投票所取締	自第六十九條至第七十七條	百六十九丁
第十二章	當選訴訟	自第七十八條至第八十八條	百七十一丁
第十三章	罰則	自第八十九條至第一百零五條	百七十四丁
第十四章	補則	自第一百零六條至第一百十一條	百八十三丁

衆議院議員選舉法附錄

法律第四號

會計法

第一章	總則	自第一條至第四條	二百十丁
-----	----	----------	------

第二章	豫算	自第五條至第六條	二百十一丁
第三章	収入	第十條	二百十二丁
第四章	支出	自第十一條至第十五條	二百十三丁
第五章	決算	自第十六條至第十七條	二百十五丁
第六章	期滿免除	自第十八條至第十九條	二百十七丁
第七章	歲計剩餘定額繰越豫算外收入及定額戻金	自第二十條至第二十三條	二百十八丁
第八章	政府ノ工事及物件ノ賣買貸借	自第二十四條至第二十五條	二百十九丁
第九章	出納官吏	自第二十六條至第二十九條	二百二十二丁
第十章	雜則	自第三十條至第三十一條	二百二十三丁
第十一章	附則	自第三十二條至第三十三條	二百二十四丁

勅令第十一號

貴族院令

自第十三條至第十三條	二百二十六丁
------------	--------

皇室典範

第一章	皇位繼承	自第九一條	二百三十一丁
第二章	踐祚即位	自第十二條	二百三十三丁
第三章	成年立后立太子	自第十三條	二百三十四丁
第四章	敬稱	自第十七條	同丁
第五章	攝政	自第十八條	二百三十六丁
第六章	太傅	自第二十五條	二百三十七丁
第七章	皇族	自第二十九條	同丁
第八章	世傳御料	自第三十條	二百四十丁
第九章	皇室經費	自第四十五條	同丁
第十章	皇族訴訟及懲戒	自第四十七條	二百四十一丁
第十一章	皇族會議	自第四十八條	二百四十二丁
第十二章	補則	自第五十四條	二百四十三丁

大日本帝國憲法精義

星野憲治校閱
 有賀武雄校閱
 佐藤佳三郎註解

(註)憲法トハ英語ニ所謂「コンステテューション」ニシテ其意義ハ建設法ナリ語ヲ替ヘテ之ヲ云ヘハ國家組成ノ根元法ニシテ又國ト人民トノ權利義務ヲ規定スル大法典ナリ故ニ立法行政司法三種ノ施行ハ必ス之ニ準シテ運轉スヘキ者ナレハ恰モ航海ノ磁針盤ニ於ケルカ如ク然リトス

第一章 天皇

(註)本章ハ合計十七條總テ天皇ノ保有シ玉ヘル政權ヲ示

ス而シテ歐米諸國ノ憲法ニ於テハ概テ最初ニ國民ノ權
利義務ヲ定メタリ然レモ我ト彼トハ其國情ヲ異ニスル
ヲ以テ天皇ノ御事ハ必ス冒頭ニ於テ掲ケラルヘキハ蓋
シ當然ノ順序ナリトス

第一條

大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス

(註)本條ハ神武天皇以來二千五百年間ノ不文憲法ヲ明記
セラレタルモノニシテ皇統連綿ノ主權者ニ非サレハ今
後幾万年ニ至ルモ日本天皇タルヲ得ス又天皇ハ此土ニ
君臨シ親シク之ヲ統轄主宰シ玉フヘキ万世不易ノ國体
ヲ示サレタルナリ

第二條

皇位ハ皇室典範ノ定ムル處ニ依リ皇男子孫之ヲ繼承
ス

[參照] 皇室典範第一條乃至第九條、

(註)皇位御繼承ノ大典一定セサルニ於テハ紛擾ヲ生シ時
ニ或ハ流血ヲ見ルノ不祥アラソ若シ然ラハ皇室ノ御基
礎ヲ薄弱ナラシムルノミナラス臣民ノ不幸是レヨリ大
ナルハナシ故ニ皇室典範ヲ定メ皇位ノ繼承ハ必ス之ニ
據ル可キヲ示サル、而シテ本條ニ皇男子孫之ヲ繼承スト
アルハ向來女帝ヲ立テ玉ハサルノ聖慮ナリ勿論舊來ト
テモ内親王ノ帝位ニ就キ玉ヘシハ皇太子ノ御幼冲ナル
場合等ヨリ起レル者ニテ元ヨリ不得已者ナレモ今ヤ已
ニ世襲皇族アリ猶且皇室典範第五章ヲ以テ攝政職ヲ規

定セラレタレハ女帝ヲ立ルノ場合ナカル可キナリ

第三條

天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス

(註)神聖トハ汚ス可ラサルノ義ニテ尊嚴無比ナルヲ云フ

宗教上ノ神聖ト同シカラス侵ス可ラストハ英語ノ所謂

Sobrans can not be subjected to law, 即チ「主權者ハ法律ノ支配ヲ受

ケス」トノ原則ヲ掲ケタルナリ要スルニ天皇ハ假令政務

其他ノ事ニ付キ失錯アルモ國家又ハ一己人ニ對シ其責

ナキヲ云フ蓋シ吾人ハ自ラ吾人ノ頭腦ヲ罰スル能ハサ

ルガ如ク天皇ハ一國ノ頭腦ニ坐しませば之ニ其責ヲ販

シ奉ルハ道理ノ許ルサ、ル處ナリ伊太利憲法第三條モ

本條ト同文ニシテ其他ノ立憲國モ既チ本條ト同趣旨ノ

法條ヲ掲ケタリ但シ第五十五條ノ註解ヲ參照スヘシ

第四條

天皇ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シ此憲法ノ條規

ニ依リ之ヲ行フ

(註)國ノ元首トハ一國ノ頭首主腦ノ謂ナリ統治權トハ所

謂立法行政司法ノ三大權ノ大柄ヲ握ルノ權ニシテ主權

ト云ヘ又政權トモ云フ而シテ其統治權ヲ總攬シトハ右

ノ三大權ハ直ニ天皇ノ御親裁ニ屬スル者アリ或ハ帝國

議會ト天皇トノ間ニ屬スル者等アリト雖モ其大綱ハ是

亦天皇ノ御保有タルヘキヲ云フ但シ天皇ハ何事モ規矩

ナク只聖意ノまに、行ハセラル、ニハ非ス必ス本法

ノ制限ヲ踰ヘサルヲ明示セシ爲メ特ニ此憲法ノ條規ニ

依リ之ヲ行フト定メラレタルナリ

第五條

天皇ハ帝國議會ノ協賛ヲ以テ立法權ヲ行フ

(註)帝國議會ハ所謂國會ニシテ其解說ハ第三章ニ詳カナリ而シテ本條協賛ノ二文字ニ就テハ學者間往々異說アリト雖モ余ハ斷シテ之ヲ協議贊成ノ意ナリトス今其筋ニテ英文ニ反譯セラレタル我憲法ヲ閱讀スルニ協賛ノ二文字ヲ Consent^{コンセン}ト即チ承諾トセラレタリ是レ著者ノ所見ノ誤ヲサルヲ知ルニ足ラソ故ニ天皇ハ立法ノ議案ニシテ若シ否決帝國議會ニ於テシタル時ハ即チ帝國議會ノ協賛ナキ者ナルカ故普通ノ場合ニハ之ヲ施行シ玉ハサルナリ是レ其臆說ニ非ス第八條、第三十七條、第三十九條等ニ由レハ著者ノ所論更ニ堅固ナルヲ覺フルナリ

第六條

天皇ハ法律ヲ裁可シ其公布及執行ヲ命ス

(註)法律ハ一國元首ノ裁可ヲ經及ヒ其名ヲ以テスルニ非サレハ法律ノ効力ナキハ普通ノ原則ナリトス而シテ其公布及ヒ執行ハ行政權ニ屬シ立法部則チ帝國議會ノ干預スル處ニアラス但シ法律ノ公布ハ第十五條ニ依リ國務大臣ノ副署ヲ要スル者トス

第七條

天皇ハ帝國議會ヲ召集シ其開會閉會停會及集議院ノ解散ヲ命ス

(註)本條ハ天皇ノ施政權ヲ定メタルモノニテ議會ヲ召集

シトアルハ各議員ニ對シ某月某日迄ニ參集スヘキコト
ヲ勅諭セラル、ノ義ニ解スベシ

議會ノ開閉及ヒ停會ハ天皇ノ勅命ニ由リテ始終スヘキ
者ニテ假令如何ナル事由アルモ議員自ラニ之ヲ爲ス能
ハサルナリ

衆議院ノ解散ハ如何ナル場合ニ於テ命セラル可キカ抑
モ人ハ危險ナル情感ヲ備フル動物ナレハ國會議員ト雖
モ情感ノ誘フ處間々中正ヲ失シ竟ニハ紛擾ヲ議會ニ致
シ危險ヲ生スルコトアルハ遠ク歐州國會ノ經歷ニ照シ
近ク我府縣會之實踐ニ徴シテ明カナリ斯ル場合ニ於テ
ハ天皇ノ政權ニ依リ衆議院ノ解散ヲ命セラル、者トス
然リ而シテ本條ニ單ニ衆議院解散ノ場合ノミニ關スル

規定アリテ貴族院解散ノ規定ナキ所以ハ元來貴族院ナ
ルモノハ王室ノ藩扈トモ稱スベキ貴族其他老成人ビトシ士
等ヨリ成立スル者ナレハ實際解散セラル、ガ如キ場合
ニ衝突スルナキハ之ヲ立憲諸國ノ經驗ニ照シテ明カナ
ルカ故ナリ

第八條

天皇ハ公共ノ安全ヲ保持シ又ハ其災厄ヲ避クル爲メ
緊急ノ必要ニ由リ帝國議會閉會ノ場合ニ於テ法律ニ
代ルヘキ勅令ヲ發ス

此勅令ハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出ス可シ若シ
議會ニ於テ承諾セサル時ハ政府ハ將來ニ向テ其効力
ヲ失フコトヲ公布スヘシ

(註)已ニ第五條ニ於テ法律ハ帝國議會ノ賛成ヲ經ルコトニ規定セラレタルモ議會ハ常ニ開カル可キ者ニ非サルヲ以テ必スシモ立法ノコトハ議會ニ附セスンハ之ヲ爲ス能ハストセハ急ニ公衆ノ安全「身軀財産ノ安固ヲ云フ」ヲ保護シ或ハ災厄「天變地異ヲ云フ」ヲ避ケシムヘキ事變ノ墮落ヲ來ルモ數百里外ニ散在セル議員ハ容易ニ召集スル能ハス看ス々々手ヲ拱シテ之カ保全ヲ計ル能ハサルニ由リ爰ニ例外ヲ以テ天皇ハ假ニ法律ト其効用ヲ同フスル勅令ヲ發セラル、コトヲ定メタル者ニテ實ニ變通ノ良法ナリトス

然レモ右ノ條規タルヤ議會閉場ノ後チニシテ已ムヲ得サルニ出テタル變則ナレハ次回ノ開會ニ當テハ之ヲ帝國

國議會ニ附シ討議セシムルハ當然ナリ若シ議會ノ之ヲ可決スルナクンハ其法律ハ將來ニ向テ消滅セシメサル可ラス然ラサレハ議會ハ竟ニ有名無實ノ者トナリテ日本臣民ハ其權利ヲ蹂躪セラル、ニ至ラン是第二項ノ設ケアル所以ナリ

然レトモ爰ニ一ノ注意スヘキ者アリ則チ右一時法律ニ代ル可キ勅令ハ假令議會ニ於テ否決スルコトアルモ其否決ノ効力ハ只將來ニ向テ生スルノミニシテ之ヲ已往ニ溯及セシメ已ニ執行シ終リシ事件ヲ償却又ハ回復ス可キ者ニアラス何トナレハ其執行ハ正當ニ天皇ノ大權ヨリ出テタル者ナレハナリ

第九條

天皇ハ法律ヲ執行スル爲ニ又ハ公共ノ安寧秩序ヲ保持シ及臣民ノ幸福ヲ増進スル爲ニ必要ナル命令ヲ發シ又ハ發セシム但シ命令ヲ以テ法律ヲ變更スルコトヲ得ス

(註)本條ハ行政權ヲ規定シ且ツ其權ノ區域ヲ定メタルナリ

「命令ヲ發シ」トハ法律ヲ執行スル爲ノ細則或ハ行政ノ規則ヲ立テ公布スルノ義ニシテ其「又ハ發セシム」ノ一句ハ内閣總理大臣若クハ主務大臣ヲシテ同上ノ事ヲ爲サシムルナリ「但シ命令ヲ以テ法律ヲ變更スルヲ得ス」トハ若シ細則ニシテ法律ヲ變更スルニ至ラハ行政權ヲ以テ立法權ヲ侵ス者ニシテ立法部即チ帝國議會ハ全ク徒法ニ

屬スヘシ抑モ一國ノ平和ハ上下互ヒニ秩序ヲ守リ或ハ彼是ノ部局互ヒニ其權限ヲ侵サトルニアリ若シ一朝之ヲ破ルトキハ騷擾之ヨリ起ラシ是レ此ノ但シ書ノ一句アル所以ナリ

己ニ述フル如ク本條ハ全ク行政權ニ屬スル者ナレハ其命令ヲ發スルニ當リ立法部タル帝國議會ノ協賛ヲ要セズ帝國議會モ亦之ニ喙ヲ容ルベキモノニアラス

第十條

天皇ハ行政各部ノ官制及文武官ノ俸給ヲ定メ及文武官ヲ任免ス但シ此憲法又ハ他ノ法律ニ特例ヲ掲ケタルモノハ各其條項ニ依ル

(註)行政各部ノ官制及ヒ文武官ノ俸給ヲ定メ及文武官ヲ

任免スルハ是レ亦行政權内ニ屬スルモノニシテ立法部ニ關セス故ニ天皇ハ帝國議會ノ協賛ヲ待タズ聖旨ノ下に施行シ玉フノミ但シ此憲法又ハ他ノ法律ニ掲ケタルモノハ各其條項ニ由ル下ハ本法第五十八條ニ規定セラレタル裁判官ノ任命ハ同條第一項ニ由リ其免官ハ同第二項ニ依リテ任免シ其他判任以下ハ所屬長官ヲシテ任免セシムルガ如キヲ云フ

第十一條

天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス

(註)兵馬ノ權ハ歐米立憲諸國モ皆之ヲ元首ニ皈ス蓋シ國安ヲ保ツニ於テ最モ切要ナレハナリ若シ之ヲ臣下ニ委テハ所謂兵力ノアル處ニ權勢ヲ生シ竟ニハ皇室ノ尊榮ヲ侵シ國民ノ幸福ヲ妨クルニ至ル可ケレハナリ

第十二條

天皇ハ陸海軍ノ編制及常備兵額ヲ定ム

(註)陸海軍ノ編制トハ師團旅團艦隊其他總テ海陸軍ノ組織ニ立テテ云ヘ常備兵額トハ常備兵ノ員數ヲ云フ之ヲ定ムルハ天皇ノ御大權ト定メラル然レモ徵兵令ノ如キハ大ニ軍隊ノ組織ニ隣接スル勿論ナレトモ之レヲ以テ直チニ陸海軍ノ編制ト云フ能ハス是レ純然タル法律ナレハ必ラス帝國議會ノ協賛ヲ經サレハ施行セラルコトナシ

本條ト第六十八條トヲ比照スレハ天皇ノ定メ玉ヘシ軍隊ノ組織常備兵額等ニ由リ當然ニ要スル經費ニ對シ帝

國議會ハ政府ノ全意ヲクシテ輕減削除スルヲ得サル
ナリ何トナレハ第六十七條中「憲法上ノ大權ニ基ツケル
既定ノ歳出云々」トアリテ本條ハ即チ其大權ノ一ナレハ
ナリ

第十三條

天皇ハ戰ヲ宣シ和ヲ講シ及諸般ノ條約ヲ締結ス

(註)和戰ノ事ハ施政ノ一部ニ屬スルガ故ニ帝國議會ノ協
賛ヲ要セス諸般ノ條約トハ外國交渉ノ條約ヲ云フ是亦
施政ノ一部ナリ是等ノ大權ハ歐米諸國ノ共和制ニ於テ
モ尙ホ且之ヲ一國元首ノ掌握ニ皈ス而シテ宣戰講和條約
締結ノ如キハ最モ掛引上秘密ヲ要スル者ナレハ到底多
衆ノ能ク當リ得可キ者ニ非ス故ニ此大權ハ天皇ノ專有

シ玉フ處ニシテ只其御親裁ニ從フ者トス

第十四條

天皇ハ戒嚴ヲ宣告ス

戒嚴ノ要件及効力ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

(註)戒嚴トハ戰時若クハ事變ニ際シ全國又ハ一地方ヲ區
畫シ警戒スルノ方法ニシテ軍略上必要ノ處置ナリ戒嚴
ノ要件トハ合圍地臨戰地ノ境內ニ於テ軍需ニ供スヘキ
諸物品ヲ調査シ若クハ民有ノ兵器彈藥等ヲ檢索シ時機
ニ由リテハ之ヲ押収使用シ又戰況ニ由リ止ムヲ得サル
場合ニハ人民ノ家屋動産ヲ破壞燒毀シ其外皇室ニ對ス
ル罪國事ニ關スル罪靜謐ヲ害スル罪謀故殺毆打創傷擡
人ヲ逮捕監禁スル罪脅迫罪強盜放火決水家屋物品ヲ

毀壞スル等ノ罪ハ總テ軍衛ニ於テ裁判セシムルヲ云ヘ
 効力トハ軍人軍屬ハ抵抗者アルニ拘ハラス之ヲ執行シ
 其効果ヲ至ラシ得セシムル等ノ義ナリ而シテ戒嚴ヲ宣
 告スルハ行政上ノ大權ナレバ天皇直ニ之ヲ宣告セラル
 ト雖モ其要件効力ニ至テハ實ニ國民一般ノ服從セサ
 ル可カラサル大法典ナレハ本法第五條ノ原則ニ由リ預
 マ帝國議會ノ協賛ヲ經テ戒嚴法ヲ立ルナリ然レモ已ニ
 明治十五年八月第三十六號布告ヲ以テ戒嚴令ノ發布ア
 リ「事長文ニ涉ルヲ以テ爰ニ登載セス」故ニ帝國議會開會
 ノ後ト雖トモ改正ナキ間ハ右戒嚴令ハ法律タルノ効力
 ナ有スルヲ無論ナリ

第十五條

天皇ハ爵位勳章及其ノ他ノ榮典ヲ授與ス

(註)爵ハ公侯伯子男ニシテ位ハ正一位ヨリ從八位マテヲ
 云フ勳章ハ大勳章ヨリ八等勳章マテ及ヒ從軍章ヲ總稱
 シ其他ノ榮典トハ明治十四年第六十三号ノ褒賞條例ニ
 由リ人命ヲ救助セシ者又ハ德行卓絶ナル者ニ賜ハル褒
 賞或ハ士族平民ヲ華族ニ王ヲ親王ニ陞列シ又ハ諸宗ノ
 祖師ニ諡号ヲ贈賜セラル、ノ類ナリ此等ハ何レノ國ト
 雖モ皆元首ヨリ出ル施政上ノ大權ニシテ立法部則チ帝
 國議會ノ干豫スヘキ者ニ非サルナリ

第十六條

天皇ハ大赦特赦減刑及復權ヲ命ス

(註)大赦ニ二種アリ一ハ全國ノ罪囚一般ニ對シテ赦免ヲ

行へ以テ公權ヲ復與シ一ハ某種類ノ罪犯ニ限リ社會ノ
 狀勢ニ由リ已決ノ囚徒ニ對シ永ク其刑ヲ執行シ及ヒ被
 告人ヲ處罰スルノ必要ナリ若クハ必要ノ程度減退シタ
 ルニ際シ天皇ノ仁惠ヲ以テ其刑ヲ全免シ且公權ヲ復與
 スルヲ云へ特赦ハ只某ノ既決囚一己ノ情狀ニ對シ其刑
 ニ全免スル者ニテ公權復與及其程度ハ時々高量ニ依ル
 者ニシテ全ク公權ヲ復與セラル、トアリ然ラサルトアリ
 或ハ公權ノ幾分ヲ復與セシメラル、トアリテ其犯人ノ
 自分地位情狀等ニ由リテ一定セス減刑トハ犯人ノ悔悟
 謹慎等ノ場合ニ於テ十年ヲ減シテ六年ト爲スカ如シ復
 權ハ主刑ノ終リタル日ヨリ五年ノ後ヲ刑法第三十一條
 ニ列記セル公權ヲ復與セラレシトテ自ラ司法大臣ニ請

願シ司法大臣ヨリ天皇ニ上奏シ其許否ヲ仰クニ當リテ
 公權ヲ復與セラル、ヲ云フ最モ此大赦特赦復權及減刑
 ハ向來ニ向テ効アルノミニシテ已ニ執行シ終リタル者
 例へハ罰金沒收ノ如キハ返却セラル、者ニアラス又已
 ニ失ヘタル官位ノ如キハ將來之ヲ得ルノ權アルノミ從
 前ノ官位ニ復スルニハ非サルナリ

〔參照〕刑法

第三十一條 剝奪公權ハ左ノ權ヲ剝奪ス

- 一 國民ノ特權
- 二 官吏ト爲ルノ權
- 三 勳章年金位記貴號恩給ヲ有スルノ權
- 四 外國ノ勳章ヲ佩用スルノ權

五兵籍ニ入ルノ權

六裁判所ニ於テ證人ト爲ルノ權但單ニ事實ヲ陳述スルハ此限ニ在ラス

七後見人ト爲ルノ權但親屬ノ許可ヲ得テ子孫ノ爲メニスルハ此限ニ在ラス

八分散者ノ管財人ト爲リ又ハ會社及ヒ共有財産ヲ管理スルノ權

九學校長及ヒ教師學監ト爲ルノ權

第六十三條 公權ヲ剝奪セラレタル者ハ主刑ノ終リタル日ヨリ五年ヲ經過スルノ後其情狀ニ因リ將來ノ公撰ヲ復スルヲ得

主刑ノ期滿免除ヲ得タル者ハ監視ニ付シタル日ヨリ

五年ヲ經過スルノ後又同シ

第六十四條 大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ直チニ復權ヲ得特赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ赦狀中記載スルニ非サレハ復權ヲ得ス
赦ニ因テ復權ヲ得タル者ハ自ラ監視ヲ免シタル者トス

第六十五條 復權ハ勅裁ニ非サレハ之ヲ得可カラス

治罪法

第四百七十條 復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ
復權ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審

裁判所檢事ニ之ヲ差出ス可シ

第四百七十七條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニ
テモ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿
ニ申立ルヲ得

監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ經由ス可
シ但檢察官ハ意見書ヲ添フ可シ特赦ノ申立アリタル
時司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ添へ上奏ス可シ

第四百七十八條 司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時
ニテモ特赦ノ申立ヲ爲スヲ得死刑ヲ除クノ外特赦
ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セス

第十七條

攝政ヲ置クハ皇室典範ノ定ムル所ニ依ル

攝政ハ天皇ノ名ニ於テ大權ヲ行フ

(註)攝政職ハ天皇未ダ成年「滿十八年」ニ達シ玉ハサル時皇
室典範第十九條乃至第二十五條ニ從ヒテ之ヲ立ツ而シ
テ攝政ハ天皇ノ御名ニ於テ本章第四條以下第十六條迄
ノ大權ヲ行フヲ毫モ天皇ニ異ナルヲナシ
攝政ハ夫ノ代理法ニ準據スヘキ者ニシテ畏キ事ナカラ
天皇ノ御後見ナルカ故ニ自己ノ名ヲ以テ大權ヲ行フ可
キニ非ス必スシモ天皇ノ御諱ヲ以テスルニ非サレハ本
章ノ大權ヲ行フノ權ヲ有セサルナリ

第二章 臣民權利義務

第十八條

日本臣民タルノ要件ハ法律ノ定ムル所ニ依ル

(註)日本臣民タルニハ必要ナル條件アリ恚ハ民法人事篇ニ記載スル處ノ條件ヲ備ヘサレハ日本臣民タルノ資格ヲ有セズ則チ日本ニ於テ生レタル外國人ノ如シ又外國ニ於テ生ル、モ日本人ノ子ハ日本臣民タルノ分限アリ又外國人ト雖トモ法律ノ規定ニ從ヒ歸化シタル者ハ日本臣民ナリトス然リ而シテ今日猶ホ未タ民法ノ發布ナキヲ以テ詳細ニ之ヲ論スル能ハズト雖モ要スルニ戶籍ニ登記セラレタル者ハ皆日本臣民ナリト解ス可キナリ

第十九條

日本臣民ハ法律命令ノ定ムル所ノ資格ニ應シ均ク文武官ニ任セラレ及其ノ他ノ公務ニ就クコトヲ得

(註)法律命令ノ定ムル處ノ資格トハ官吏登用規則府縣會規則市町村制度及ヒ衆議院議員撰擧法等ニ定メラレタル資格ヲ有スル者ハ文武大小ノ官吏ニ任セラレ又ハ議員ト爲リテ公務ニ就クコトヲ得ルナリ是レ社會ハ一人ノ社會ニ非ス又ハ某種族ノミノ社會ニモ非ス則チ社會ノ人ノ社會ナレハ合法ノ資格ヲ有スル者ノ此權アルハ當然ナリ

第二十條

日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ兵役ノ義務ヲ有ス

(註)日本臣民ニシテ日本國ヲ守ラスハ誰レカ之ヲ守ル者アラソ然ラハ兵役ニ服スルハ實ニ國民タルノ本分ニシテ尤モ貴重ニシテ榮譽アル義務ナリトス然レモ國民タル者悉ク壯丁ニ非ス又合格ニ非ス又皆ナ兵役ニ就クノ

必要ナシ由テ本條ハ只大休ノ標準ヲ示シタルニ止マル
ノミ故ニ法律ニ從ヒ兵役ノ義務ヲ有スト云ヘルナリ

第二十一條

日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ納稅ノ義務ヲ有ス

(註)井ヲ鑿テ飲ミ枝ヲ折テ燒キ日出テ耕シ日入テ休ミ平
居安全ナルハ是レ誰レノ賜ソヤ即チ政府ノ保護アル所
以ナリ我レ已ニ保護ヲ受ク必ラス其代價ヲ償ハサル可
ラス納稅ハ則チ保護ニ報ユルノ代價ナリ然リ而シテ世
上百般ノ事物一トシテ最初ヨリ價直ノ定マリタルモノ
アラズ正札附ノ物品モ購買者ノ同意シテ代價ヲ拂フニ
非スソハ管ニ空價タルニ過キス爰ニ於テカ知ル代價ハ
双方ノ合意ニ由リテ始テ定マル者ナルヲ今夫レ納稅ヲ
以テ保護ノ代價ナリトセハ保護ノ實價ト納稅額トハ互
ニ過不及アル可ラス乃チ國會ヲ以テ之ガ評量ヲ爲サシ
ムルナリ故ニ法律ノ定ムル所ニ從ヒ納稅ノ義務ヲ有ス
トハ云フナリ

第二十二條

日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ居住及移轉ノ自由ヲ有
ス

(註)居住トハ本籍ヲ定メ及ヒ寄留止宿等ヲ指シ移轉トハ
甲ノ府縣ヨリ乙ノ府縣ニ轉居シ若クハ外國ニ移住等ヲ
云フ人間ノ相集リテ社會ヲ爲スハ元ト是レ幸福ヲ至フ
セソカ爲メニシテ障害抵抗ノ甚キ方向ニ向テ進行スル
ハ人類先天ノ法則ナリ河東饑ユレハ河西ニ移ル敢テ主

治者ノ命令ヲ要セス甲地生活ノ境遇不可ナレハ乙地ニ
 轉スルハ各人ノ自由ナリ權理ナリ之ヲ抑制スヘキ者ニ
 非ス徳川十五代ノ間全ク海外ニ航スルヲ禁シ人類固有
 ノ權理ヲ妨害シ之レカ爲メ學術ニ工業ニ殖産ニ痛ク進
 歩ヲ妨害シタルハ實ニ蔽フ可ラサルノ事蹟タリ是實ニ
 本條ニ住居移轉ヲ自由ナラシムル所以ナリ然レモ送籍
 寄留等ノ手續ヲ爲サスシテ移轉シ或ハ無願ニテ海外へ
 航スルアラハ弊害百出終ニハ行政ヲシテ治理ス可ラサ
 ルニ至ラシメシ是本條特ニ「法律ノ範圍内ニ於テ」ノ一
 句ヲ掲ケタル所以ナリ

第二十三條

日本臣民ハ法律ニ依ルニ非スシテ逮捕監禁審問處罰ヲ

受クルコトナシ

(註)假令其地位ハ裁判官檢察官司法警察官ト雖モ法律「刑
 法治罪法ノ類」ニ依ルニアラスシテ處分スルハ法ノ堅ク
 禁スル處ナリ又假令犯罪者ナルモ法律ニ背キタル處置
 ニ對シテハ服従スルノ義務アルヲナシ凡ソ人ノ權理ヤ
 其種類多ク一トシテ貴重ナラザル者ナシト雖モ身体ノ
 自由ヨリ切ナルハナク又之ヨリ貴重ナル者ハアラス然
 ニ若シ法律ニ依ルニアラスシテ妄リニ捕縛拘留訊問刑
 罰セラルハニ於テハ吾人ノ頭首ハ吾人ノ者ニアラス吾
 人ノ手足ハ吾人ノ者ニ非ス吾人將タ何ニ依テカ安全ヲ
 保タシ是レ本條ノ設ケアル所以ナリ

〔參照〕治罪法

第百條 現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

第百一條 重罪輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

一犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラル、時

二兇器贓物其他犯人ト思料ス可キ物件ヲ携帶シタル時

三家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戸主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタル時

第百二條 司法警察官及ヒ巡查其職務ヲ行フニ當リ重罪輕罪ノ現行犯アルヲ知リタル時ハ令狀又ハ命令ヲ待タスシテ被告人ヲ逮捕ス可シ

違警罪ノ現行犯アルヲ知リタル時ハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ其氏名住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ違警罪裁判所ニ引致スルヲ得

第百三條 巡查被告人ヲ逮捕シタル時ハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第百四條 司法警察官被告人ヲ逮捕シ又ハ之ヲ受取リタル時ハ假ニ被告人ノ訊問及ヒ檢證處分ヲ爲ス可シ
第百五條 何人ニ限ラス重罪輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルヲ得

第六條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引致スルヲ得サル時ハ自己ノ氏名職業住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡查ニ引渡スヲ得
被告人ヲ巡查ニ引渡シタル時ハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可シ

被告人又ハ巡查ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルヲ求ムルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ其求ヲ拒ムヲ得ス

第一百八條 豫審判事ハ檢事又ハ民事原告人ノ起訴ニキリ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタル時ハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出廷

トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

召喚狀ニ因リ出廷シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遲クトモ出廷ノ日ヲ過クルヲ得ス

第一百九條 豫審判事ハ招呼狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ住セサル時ハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第二十條 豫審判事ハ招呼狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ勾引狀ヲ發スルヲ得

第二十一條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發スルヲ得
一 被告人定リタル住所アラサル時

二被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スルノ恐アル時
三被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケ
ントスルノ恐アル時

第二百二十二條 勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀
ヲ發シタル豫審判事ニ被告人ヲ引致ス可シ
勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ
訊問ス可シ若シ其時間ヲ經過スル時ハ勾留狀ヲ發ス
ルニ非サレハ當然之ヲ釋放ス可シ

第二百二十三條 勾引狀ヲ發シタル前被告人既ニ豫審判
事ノ管轄地外ニ在ル時ハ被告人ヨリ其所在ノ地ノ豫
審判事ノ取調ヲ求ムルヲ得其求ヲ受ケタル豫審判
事ハ假ニ被告人ヲ勾留シ速ニ勾引狀ヲ發シタル豫審

判事ニ其旨ヲ通知ス可シ

第二百二十四條 前條ノ場合ニ於テ勾引狀ヲ發シタル豫
審判事ハ被告人ヲ勾留シタル豫審判事ニ訊問ノ條件
ヲ明示シテ其處分ヲ囑託シ又ハ前ニ發シタル勾引狀
ヲ以テ被告人ヲ送致ス可キヲ請求ス可シ
其囑託ヲ受ケタル豫審判事ハ被告人ヲ訊問シタル後
其旨ヲ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ通知シ其意見ヲ
聽キ被告人ヲ放免シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ
管轄豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十五條 豫審判事ハ召喚狀又ハ勾引狀ヲ受ケタ
ル被告人疾病其他正當ノ事由アリテ令狀ニ應スル能
ハサルヲ證明シタル時ハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ

訊問スルヲ得若被告入其管轄地外ニ在ル時ハ其所
在ノ地ノ豫審判事ニ訊問ノ事ヲ囑託ス可シ

第二百二十六條 勾留狀ハ被告人逃亡シ又ハ第二百二十三
條ノ場合ヲ除クノ外被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上
ノ刑ニ該ル可キ者ト思料スルニ非サレハ之ヲ發スル
ヲ得ス

第二百二十七條 豫審判事ハ勾留狀ヲ執行シタルヨリ十
日ヲ過クル時ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若クハ第二百十九
條ノ規則ニ從ヒ被告人ヲ責付ス可シ
檢事ハ被告人ヲ責付スルヲナク更ニ十日間之ヲ勾留
ス可キヲ豫審判事ニ求ムルヲ得

第二百二十八條 收監狀ハ既ニ取掛リタル豫審ノ手續ヲ

檢事ニ通知シ且其意見ヲ聽キタル後ニ非ザレハ之ヲ
發スルヲ得ス

第二百二十九條 收監狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

- 一 被告事件ノ概略及ヒ加重減輕ノ模様アル時ハ其概
畧

二 其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條

三 檢察官ノ意見ヲ聽キタルヲ

第三百十條 總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名
職業住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除クノ外其氏名分
明ナラサル時ハ容貌體格等ヲ明示ス可シ
又令狀ニハ之ヲ發スルノ年月日時ヲ記載シ豫審判事
及ヒ書記署名捺印ス可シ

勾引狀勾留狀收監狀ハ巡查ヲシテ之ヲ執行セシム
 第三百三十一條 召喚狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ書記
 局所屬ノ使丁ヲシテ被告人又ハ其住所ニ之ヲ送達セ
 シム

第三百三十二條 拘引所拘留狀收監狀ハ日本全國ニ於テ
 之ヲ執行ス但時宜ニ因リ正本數通ヲ作り巡查數人ニ
 分付スルコトアル可シ
 前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其謄
 本ヲ下付ス可シ此場合ニ於テハ第二十三條第二項第
 四項ノ規則ニ從フ

第三百三十三條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ被告人
 其家宅若クハ他人ノ家宅ニ潜匿シタリト思料シタル
 時ハ其地ノ戸長又其差支アル時ハ隣佑二名以上ノ立
 會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ
 巡查ハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ハラヌ搜索調
 書ヲ作り立會人ト共ニ署名捺印ス可シ
 家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スコトヲ得ス

第三百三十四條 豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潜匿
 シタルコトヲ知リ又ハ潜匿シタリト思料シタル場合ニ
 於テ被告事件急速ヲ要スル時ハ巡查ニ令狀ヲ帶行セ
 シムルコトヲ得

巡查ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察
 官ニ令狀ヲ示シテ即時ニ執行ヲ求ム可シ
 第三百三十五條 豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スル

不能ハザル時ハ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ捜査及逮捕ヲ爲ス可キヲ請求スルヲ得
請求ヲ受ケタル檢事長ハ管轄地内ノ檢事ヲシテ捜査及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

第三百三十六條 陸海軍在營ノ軍人軍屬ニ對シ令狀ヲ發シタル時ハ所屬長官ニ令狀ヲ示スベシ長官ハ己ムヲ得サル差支アルニ非サレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應セシム可シ其行軍ノ際亦同シ

第三百三十七條 拘留所又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監倉ニ引致ス可シ若シ其監倉ニ引致スルヲ能ハサル時ハ假ニ最近ノ監倉ニ引致スルヲ得

何レノ場合ニ於テモ監倉長ハ令狀ヲ檢閲シテ被告人ヲ受取り其證書ヲ渡ス可シ

第三百三十八條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ之ヲ執行シタルヲ又執行スルヲ能ハサル時ハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載ス可シ

巡查ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ書記局ニ差出シ書記ハ其受取證書ヲ渡ス可シ

第三百三十九條 拘留狀又ハ收監狀ヲ受ケ可キ被告人既ニ監倉若クハ獄舎ニ在ル時ハ書記ヨリ之ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正本及ヒ謄本ニ記載ス可シ

第四百十條 密室監禁ノ場合ヲ除クノ外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬故舊又ハ代言人ニ

接見スルヲ得

書翰書籍其他ノ書類ハ豫審判事ノ檢閲ヲ經タル後ニ非サレハ被告人ト外人ト之ヲ授受スルヲ許サス但豫審判事ハ其書類ヲ留置クヲ得

第四百十一條 豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非スト思料シタル時ハ豫審中何時ニテモ拘留狀又ハ收監狀ヲ取消ス可シ但收監狀ヲ取消ス時ハ豫メ檢察官ノ意見ヲ聽ク可シ

第四百十二條 監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與ス可シ

第四百十三條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ

以テ拘留狀若クハ收監狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲ爲スヲ得

第四百十四條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類貨幣其他ノ物品ヲ授受スルヲ許サス

食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特ニ指名シル者ヲシテ之ヲ給與セシム

第四百十五條 密室監禁ハ十日ヲ超過ス可ヘカラス但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルヲ得

言渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通

常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ

刑法

第二百七十六條 官吏擅ニ威權ヲ用ヒ人ヲシテ其權利ヲキ事ヲ行ハシメ又ハ其爲ス可キ權利ヲ妨害シタル者ハ十一日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十八條 逮捕官吏法律ニ定メタル程式規則ヲ遵守セスシテ人ヲ逮捕シ又ハ不正ニ人ヲ監禁シタル者ハ十五日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但監禁日數十日ヲ過クル毎ニ一等ヲ加フ

第二百七十九條 司獄官吏程式規則ヲ遵守セスシテ囚

人ヲ監禁シ若クハ囚人ヲ出獄セシム可キノ時ニ至リ之ヲ放免セサル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第二百八十條 前二條ニ記載シタル官吏又ハ護送者囚人ニ對シ飲食衣服ヲ屏去シ其他苛刻ノ所爲ヲ施シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ囚人ヲ死傷ニ致シタル時ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス

第二百八十一條 水火震災ノ際官吏囚人ノ監禁ヲ解クヲ怠リ因テ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加フ

第二百八十二條 裁判官檢事及ヒ警察官吏被告人ニ對

シ罪狀ヲ陳述セシムル爲メ暴行ヲ加ヘ又ハ陵虐ノ所
爲アル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以
上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
因テ被告人ヲ死傷ニ致シタル時ハ毆打創傷ノ各本條
ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス

第二十四條

日本臣民ハ法律ニ定メタル裁判官ノ裁判ヲ受クルノ
權ヲ奪ハルヽコトナシ

(註)法律ニ於テ民事刑事ニ關シ裁判ノ管轄ヲ定メタルハ
單ニ公益ノ爲メノミナラス原被兩造及ヒ刑事被告人ノ
利益ヲ保護スルニ在リ故ニ是等訴訟關係人ハ法律上已
ニ自己ノ利益ナル管轄裁判所ノ裁判ヲ受クル權利アリ

例ヘハ重罪ノ被告人ハ鄭重ナル重罪裁判所ノ裁判ヲ受
クルノ權利アシハ如何ナル理由アルニ拘ハラス決シテ
輕罪裁判所ノ裁判ヲ受クルノ義務ナク又民事被告人ハ
現ニ所在ノ地ノ裁判ヲ受クルノ權利アリ決シテ數百里
外原告人住居ノ地ノ裁判所ニ呼出サル、義務ナキカ如
シ

第二十五條

日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外其ノ許諾ナ
クシテ住所ニ侵入セラレ及搜索セラレコトナシ

(註)住所ハ各人ノ依テ以テ幸福ヲ全フシ快樂ヲ保ツノ要
所ニシテ假令壁破レ雨漏ルノ茅屋ト雖モ是其城廓タリ
城主即チ家主ノ意ニ抗シテ他人ノ侵入スルアラハ吾人

ノ安全ヲ妨ク幸福ヲ損スル最モ切ナルヲ以テ吾人ハ之ヲ拒ムノ權ナカル可ラス然レモ又爰ニ例外法ノ必要ナルヲアリ例ヘハ犯人其家宅内ニ潜伏シ或ハ室内ニ兇器贓物等ヲ隠匿シタル場合ニハ法律上ノ定式ヲ履行シ強テ之ニ侵入スルハ公益ノ爲メ又甚タ緊要ナリトス然レトモ我治罪法第三百三十三條第三項ヲ以テ「家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲ス」ト得ス「ト定メタルヲ以テ當該官更ト雖モ夜間ハ決シテ民家ニ侵入スルヲ能ハサルナリ」
 (參照) 治罪法
 第三百六十二條 豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明スヘキ物件ヲ藏匿スルノ疑アル者ノ住所ニ臨檢スルヲ得

被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ同居ノ親族若シ其在ラサル時ハ戸長ノ立會アルヲ要ス

刑 法 第三百三十三條第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

刑 法 第七十一條 晝間故ナク人ノ住居シタル邸宅又ハ人ノ看守シタル建造物ニ入りタル者ハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス
 若シ左ニ記載シタル所爲アル時ハ一等ヲ加フ
 一 門戶牆壁ヲ踰越損壞シ又ハ鎖鑰ヲ開キテ入ルタル時
 二 兇器其他犯罪ノ用ニ供ス可キ物品ヲ携帶シテ入り

タル時

三 暴行ヲ爲シテ入りタル時

四 二人以上ニテ入りタル時

第七十二條 夜間故ナク人ノ住居シタル邸宅又ハ人

ノ看守シタル建造物ニ入りタル者ハ一月以上一年以

下ノ重禁錮ニ處ス

若シ前條ニ記載シタル加重ス可キ所爲アル時ハ一等

ヲ加フ

第七十三條 故ナク皇居禁苑離宮行在所及ヒ皇陵内

ニ入りタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第二十六條

日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外信書ノ秘密ヲ

侵サル、ユトナシ

(註)凡ソ秘密ハ百般事業ノ上ニ於テ緊要ナルモノニシテ
商工業ノ上ニ取リテハ又最モ其必要ヲ感ス其他一己人
ノ處世ニ於ケルモ亦實ニ重要ナルハ論ヲ待タス道義上
ヨリ之ヲ見ルモ秘密ハ決シテ之ヲ侵スヘキニ非ス此故
ニ歐米諸國ニ於テハ夙ニ信書ノ秘密ヲ公認セリ特ニ之
ガ郵送配達ノ特權ヲ擧ケテ政府ノ手中ニ歸シタル此國
土ニ在リテハ別シテ其保護ヲ爲サ、ル可ラス是レ本條
ノ設ケアル所以ナリ然リ而シテ此美法モ亦例外ナキ能
ハス則チ犯罪ニ關シテモ尙ホ此原則ヲ守ラサル可ラス
トセハ所謂守株ノ譏ヲ免レス是ヲ以テ我治罪法第六十
九條ニ於テ豫審判事ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若ク

ハ此等ノ者ニ對シ發シタル書類電報等ヲ受取ルヲ得ヘキ旨ヲ定メタリ

第二十七條

日本臣民ハ其所有權ヲ侵サル、ユトナシ公益ノ爲必要ナル處分ハ法律ノ定ムル所ニ依ル

(註)所有權トハ動産不産動ヲ現ニ保有スルノミナラス其収益使用處置ノ三自由ニ云フ凡ソ人ノ世ニ在ル身体ノ自由ニ次キテ貴重ナル者ハ動産不産動産ヨリ切ナルハ莫シ若シ他人ノ之ニ干渉シテ我所有權ヲ制限シ收益使用所置ヲ妨害スルアラバ吾人ハ何ニ由リテカ財産ノ安固ヲ保タンヤ曾テ徳川氏土地ノ永代賣買ヲ禁シタルハ其意富者ヲシテ貧者ノ土地ヲ兼併セシメサラシ爲ノ婆心

ヨリ出テタル者ナレトモ其所有權ヲ害スルニ至テハ一ナリ政府爰ニ見ル處アリ明治五年二月土地賣買ノ禁ヲ廢シ明ニ土地ノ所有權ヲ確認シ今又更ニ動産不産動ノ所有權ハ妨害セラル、事ナキヲ明定ス而シテ公益ノ爲メ必要ナル所分トハ國郡市町村ノ保護便益ニ供スル爲メ則チ鐵道敷設運河開鑿道路新開公舎建築等ノ場合ニ於テ政府ニ買上又ハ一時使用ノ爲メ借り入ル、チ云フ是等ハ社會公衆ノ爲メナルヲ以テ所有主タルモノ時價相當ノ報償ヲ受ケ其所有權ヲ讓リ或ハ使用ニ供セサル可ラス然レトモ此事タル人ノ所有權ヲ左右スル重大ノ事柄ナルヲ以テ法律ニ由リ之カ所置ヲ爲スヘキ旨ヲ定メタルナリ

〔参照〕

明治八年七月第三百三十二号

太政官達公用土地買上規則

第二十八條

日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス

(註)人心ノ異ナル尙ホ其面ノ如シ甲ハ心外別法ヲシト信シ乙ハ佛陀ノ現有ヲ信シ丙ハ上帝ノ存在ヲ確信シ丁ハ基督ヲ神ノ子耶蘇ト信ス其信仰ハ各々異ナリト雖モ皆是レ心靈ノ幸福ヲ追求スル所以ナリ蓋シ宗教心ハ天然ニ根ザス者ニシテ法律ノ得テ之ヲ左右スル能ハサル所ナレハ學者之ヲ指シテ安心ノ權ト云フ然リ實ニ吾人ノ權

利ナリ然レハ佛教耶蘇教ユニテリアン吾人ハ何ヲ取ルモ其自由ナリ是レ本條ニ信教ノ自由ヲ公認スル所以ナリ然レモ若シ夫レ邦家ノ安寧秩序ヲ妨ケ忠君愛國ノ大義ニ悖ルノ教理ヲ信スル宗派アラハ之ヲ禁スルハ當然ニシテ固ヨリ政府ノ爲スヘキ職分ナリトス

第二十九條

日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ言論著作印行集會及結社ノ自由ヲ有ス

(註)雀ハ雀ヲ以テ群ヲ爲シ鳩ハ鳩ヲ以テ群ヲ爲ス人ノ社會ヲ爲スモ亦如此ノミ蓋シ其群ヲ爲シ社會ヲ爲ス個々ノ間ヲ連結シテ永ク離散セシメサルハ曠々言語ノ交通アルニ因由ス果シテ然ラハ交通ハ人ノ天性ニシテ或ハ

泣キ或ハ笑ヒ或ハ哀ミ或ハ喜ヒ或ハ知リ或ハ決斷スル等是皆知情意ノ自然發作ニシテ我自ラモ之ヲ止ムル能ハズ况ヤ他人オヤ學者之ヲ稱シテ交通ノ權ト云フ夫レ言論著作印行集會結社ノ如キハ彼ノ鳥ノ相歌へ相群スルト何ノ異ナル處カアラン言論ハ云フニ及ハス著作ヤ印行ヤ亦是レ言語ノ代表ナリ集會ヤ結社ヤ所謂親和力ノ大法ニ從フ者ニシテ人間固有ノ權利ナレハ決シ他ヨリ干涉スヘキ謂ハレナシト然レモ這ハ是レ人々社會ヲ害セス又ハ之ニ危險ヲ及ホサル方面ヨリ立言シタルニテ若シ夫レ社會ヲ害シ危險ヲ及ホス可キ恐レアル者ハ法律ヲ以テ之ヲ防止スルハ論ヲ待タズ故ニ本條特ニ「法律ノ範圍内ニ於テ言論著作云々ノ自由ヲ有ス」トハ

言フナリ

第三十條

日本臣民ハ相當ノ敬禮ヲ守リ別ニ定ムル所ノ規程ニ從ヒ請願ヲ爲スユトヲ得

(註)請願モ亦所謂交通權ノ一種ナリ抑モ施行上人民ノ不利益ヲ蒙ルコトアルハ利害得失事情ノ通セサルヨリ來ル者甚ク甚カラス故ニ被治者ハ主治者ノ前ニ事情ヲ臚列シ反省ヲ請フニ於テハ未前ニ其不利益ヲ免カレシムルヲ得ヘシ然レモ請願者ハ必ス主治者ニ對シテ相當ノ敬禮ヲ守ラサル可ラス然ラサレハ請願ニ非スシテ是レ脅迫ナレハナリ

又本條ニ於テハ前條ノ如ク「法律」ノ範圍内ニ於テ「ト記セ

スシテ「別ニ定ムル所ノ規程」ニ從ヒ云々トアルハ請願ノ取扱ヒハ行政ノ所分ニシテ殊ニ社會ノ狀勢ニ由リ數々變更ヲ要スルコアル可キガ故ニ法律ト云ハズシテ規程ト言ヘルナリ

第三十一條

本章ニ掲ケタル條規ハ戰時又ハ國家事變ノ場合ニ於テ天皇大權ノ施行ヲ妨クルコトナシ

(註)天皇ノ大權トハ本法第一章ノ各條ヲ總稱スル者ナレ
凡本條ニ謂フ所ノ大權トハ第一章ノ第八條第一項同第十三條同第十四條ノ場合ヲ指ス者ニシテ其他ニ及フ者ニ非ス何ヲ以テカ之ヲ云フ曰ク本條「戰時又ハ國家事變」ノ文字之ヲ証言スルナリ

一已人ノ民權元ヨリ重キニ相違ナシト雖モ戰時又ハ國家事變ニ際シ一人ノ民權ヲ重ニスルガ爲ニ億萬人ノ安全ヲ省ミサルハ是亦當理ニ非ス故ニ戰時又ハ事變ニ際シテハ戒嚴令ニ由リ人ノ家屋ヲ燒キ拂へ或ハ住所ニ侵入シ或ハ作毛ヲ薙キ或ハ人民ノ旅行ヲ箠制シ若クハ某ノ結社集會ヲ解散セシム等ノ必要アリ是レ本條アル所以ナリ

第三十二條

本章ニ掲ケタル條規ハ陸海軍ノ法令又ハ紀律ニ抵觸セサルモノニ限り軍人ニ準行ス

(註)本章各條ノ權利義務ハ官民ノ別ナリ貴賤貧富ノ分チナリ一様平等ニ之ヲ保有スル者ナレハ軍人ト雖トモ均

シク此權利義務ヲ有スルハ論ヲ待タズ然レトモ元來軍人ハ特ニ嚴重ナル紀律ノ下ニ置クヲ必要ナレハ政論ヲ主張シ或ハ政治上ノ主義ヨリ著作印行集會及結社若クハ請願スル等ノ事ハ軍律ノ嚴禁スル所ナリ故ニ本章ハ陸海軍ノ刑法訓令又ハ紀律ニ抵觸セサル箇條ノミニ限リ軍人ニ通用セラレ、者トス

第三章 帝國議會

本章總テ二十二條帝國議會ノ組織及ヒ權限ヲ定ム帝國議會ハ所謂國會ニシテ其司掌ハ立法及ヒ歲出入ノ豫算ヲ議定スルニ在リ夫レ人生ハ各々孤立スル時ハ畜ニ生活上困難ナルノミナラス風水疫病等ノ難ニ會ヘ或ハ強敵ノ侵襲ニ遇フモ

之ヲ防衛スル能ハス爰ニ於テカ人々相集リテ社會ヲ爲シ以テ互ニ相保護シ外物ノ刺衝ニ備フルニ至レリ由之觀之人類社會ヲ爲スノ目的ハ實ニ善惡ヲ遠ク幸福ヲ全フスルニ在ルヤ明カナリ然リ而シテ如何ニセハ能ク其目的ヲ達シ得ルカハ其社會ノ成立進歩ノ程度風俗人情等ノ模様ニ由リテ自ラ異ナル者アリト雖モ概シテ半開以上ニ達シタルノ人民ニ適當ナルノ法則ハ代議政ヲ以テ尤モ恰當ナリトス今ヤ地球上ノ一國ヲ形チツクル者一有餘而シテ已ニ國會ヲ設立セル者ハ其内七十餘國ノ多キニ達セリ蓋シ偶然ニ非サルナリ抑モ已レテ知ル者ハ已レヨリ善キハナク已レテ治ムルハ已レヨリ勝ル者ナシ語ニ曰ク天下ハ一人ノ天下ニ非

ス天下ノ人ノ天下ナリト實ニ千古ノ金言ナリ果シテ然
ラハ天下ヲ治ムルハ天下即チ全國民ニ勝ル者アル可ラ
ス然レモ數千萬ノ人民ヲ容ル可キ議事堂ヲ建ル能ハス
其代議士ヲ出シテ以テ大事ヲ議セシム豈ニ夫レ適當ナ
ラスヤ

第三十三條

帝國議會ハ貴族院衆議院ノ兩院ヲ以テ成立ス

(註)貴族院ハ所謂上院ニシテ衆議院ハ下院ナリ帝國議會
ハ此二者ヲ以テ組織スル旨ヲ示ス論者或ハ二局議院ノ
制ハ日子ヲ空過シ費用ノ多キ等ヲ以テ非難スル者アレ
モ是レ無識ノ致ス所ニシテ採ルニ足ラサルナリ二局議
院ノ制タル其利一局議員ニ勝ル殊ニ大ナル者アリ二局

議院ノ制ハ上下兩院彼是相制シ相省ミテ議事ノ鄭重ニ
至ル利アリ且又上下兩院互ニ勤勉其職務ヲ盡スノ利アリ

坤輿己ニ國會ヲ開キタル七十餘國ノ内一局議院ノ制ヲ
用フル者ハ歐洲中部ニ於テ僅々二三ノ小國アルノミ之
ニ由テ之ヲ推スモ二局議院ノ良制ナルヲ知ルヘシ

第三十四條

貴族院ハ貴族院令ノ定ムル所ニ依リ皇族華族及勅任セ
ラレタル議員ヲ以テ組織ス

第三十五條

衆議院ハ撰擧法ノ定ムル所ニ依リ公選セラレタル議員
ヲ以テ組織ス

(註)右二條ハ別ニ解説ヲ要セス

第三十六條

何人モ同時ニ兩議院ノ議員タルコトヲ得ス

(註)假令同時ニ兩議院ノ議員ヲ兼スルコトヲ得ルトスルモ一人ノ体ヲ以テ同時ニ兩院ニ對シ其任ヲ盡ス能ハサルノミナラス實際種々ノ衝突ヲ生シ剩ヘ法律ニ於テ二局議院ノ制ヲ取リタル趣旨ヲシテ無効ナラシムルニ至ルノ恐レアルヲ以テ兼任ヲ許ルサレサルナリ

第三十七條

凡テ法律ハ帝國議會ノ協賛ヲ經ルヲ要ス

(註)法律案ハ政府又ハ帝國議會ノ草スル所ニシテ帝國議會之ヲ討議可決シタル上第六條ニ由リ天皇之ヲ裁可公

布セラル而シテ法律トハ一度建設シタル上ハ容易ニ變更セシテ一般人民ノ遵守ス可キ者ヲ云フ例ヘハ刑法治罪法民法商法訴訟法ノ類ナリ但シ從來我國ニ於テハ屢々法律ト規則ト名稱ヲ混用シ來リタレトモ國民一般ニ遵守スヘキ者ハ假令其名稱ハ徵發令ト云ヘ戒嚴令ト云ヘ徵兵令ト唱フルモ皆國民一般ノ遵守スヘキ者ニシテ其性質ハ何レモ法律ナレハ帝國議會開會ノ後ハ第八條第一項ノ場合ヲ除ク外ハ必ス其協賛ヲ經サレハ法律ト爲ラサルナリ然レトモ只一部ノ人民ノミニ適用シ若クハ法律ヲ執行スル爲メノ細則ハ法律ニ非ス例ヘハ醫師免許規則代言人取締規則國稅取扱手續ノ如キハ是法律ニ非スシテ行政權内ニ屬スル規則ナルヲ以テ立法

部タル帝國議會ノ干預スヘキ所ニアラス政府ハ直ニ之ヲ施行スルヲ得ルナリ

第三十八條

兩議員ハ政府ノ提出スル法律案ヲ議決シ及各々法律案ヲ提出スル事ヲ得

(註)本條末尾ニ在ル得ノ文字ニ注意スヘキ要所ナリ此文
字ハ本文「及ヒ」以下ノ字句ニノミ係ル者ニシテ其以上ニ
係ル者ニアラス何トナレハ國會ナル者ハ原案ニ對シテ
必ス討議可否ハ其結果ニ任スレ「ヒ」スルノ義務アレハナ
リ
議會自ラ法律案ヲ提出スル事ニ就テハ歐洲諸國ノ國會
ニ於テハ屢々政府ニ向テ強求シ種々ノ故障ヲ破リテ漸

ク之ヲ得タレ「ヒ」日耳曼帝國ノ如キハ下院未タ此權ヲ得
ル能ハズ然ルニ我國ニ於テ當初ヨリ此權限ヲ與ヘラレ
タルハ實ニ可賀ノ至リナリ蓋シ帝國議會ハ立法部ナレ
ハ自ラ法律案ヲ草スルモ決シテ行政權ヲ侵ス者ニ非サ
ルノミナラス政府ヨリ發シタル法律案ト至ク意見ヲ異
ニシ或ハ政府ノ注意セサル法律ヲ創定セントスルノ場
合ニハ必ス此權限ノ必要ヲ感スルコトアル可シ而シテ此
權限ヲ議會ニ與フルハ獨リ國民ノ利益ニ止マラス政府
モ亦大ニ便ナルアリ從來原案ニ對シ妄リニ否決スルノ
弊アルハ議員ノ眼光實地ニ達セサルノ弊アルニ由ル者
ナレハ議會ヲシテ草案權ヲ有セシムルニ於テハ自然眼
光ノ實地ヲ穿ツアリテ其見識ヲ廣クシ從テ妄リニ否決

スルノ弊ヲ防クヲ得可シ是レ本條議會ヲシテ自ラ法律案ヲ草スルヲ得セシメタル所以ナリ然レトモ議會自ラ議案ヲ發セントスルニハ二十名以上ノ賛成アルニ非ス
ンハ議員法第二十九條ノ制限アリテ之ヲ爲ス能ハサルナリ

第三十九條

兩議院ノ一ニ於テ否決シタル法律案ハ同會期中ニ於テ再ビ提出スルコトヲ得ス

(註)政府若クハ帝國議會ヲ發シタル法律案ニシテ貴族院或ハ衆議員ノ一方ニ於テ否決シタル時尙ホ同一ノ議案ヲ同一會期ニ於テ提出スルハ議會ノ尊嚴ヲ侵ス者ナレハ決シテ許ルス可キニ非ス去レド社會ノ狀勢ハ常ニ活

動スル者ナレハ今日ノ非トスル處明日必スシモ非ナラス今年否トスル所明年必スシモ否ニアラス故ニ次年ノ會期ニ於テハ前年度ニ否決シタル議案ト雖モ之ヲ提出スルコトヲ得ルナリ

第四十條

兩議院ハ法律又ハ其ノ他ノ事件ニ付各々其ノ意見ヲ政府ニ建議スルコトヲ得

但シ其ノ採納ヲ得サルモノハ同會期中ニ於テ再ビ建議スルコトヲ得ス

(註)議會自ラ法律案ヲ發スル時ハ假令可決スルモ政府ノ不同意ナルニ於テハ或ハ天皇ノ御大權ヲ以テ不認可ニ屬スルモ計リ難ク故ニ預シメ之ヲ催ガシ政府ヨリ法律

案ヲ發スルニ於テハ立法行政二部ノ調和ヲ得ルノ益アリ又帝國議會ハ行政權ヲ有スルニハ非サレモ而モ國家ノ大老ト云フ可キ者ヨリ成立スルモノナレハ國家ノ大事ニ就キ建議スルヲ得セシムルハ官民ノ大利益ナルヨリ本條ノ設ケアリ而シテ建議トハ法律上ノ議會公會等ノ議決ニ由リ提出スル處ノ意見ヲ云フ故ニ彼ノ一私人ノ建白トハ大ニ其性質ヲ異ニシ固ヨリ請願條例等ノ支配ヲ受ケサルナリ

本條但書ハ前條ト其意同シ只政府ト議會ト其地位ヲ異ニスルノミ

第四十一條

帝國議會ハ毎年之ヲ召集ス

(註)假リニ立法ノ議案ハ毎年之レナシトスルモ第六十四條ノ條規ニ由リ國家ノ歲出歲入ハ毎年帝國議會ノ協賛ヲ要スルヲ以テ本條ノ設ケアリ

第四十二條

帝國議會ハ三箇月ヲ以テ會期トス必要アル場合ニ於テハ勅命ヲ以テ之ヲ延長スルユトアルヘシ

(註)會期ノ長短ハ歐米諸洲大概之ヲ定メサルハナシ其之レヲ豫定セサルニ於テハ自然會議ノ澁滯ヲ來シ失費ヲ要スル不懣ヲ以テナリ而シテ本條ニ其會期ヲ三箇月ト定ムルモ若シ期限内ニ議事ノ決了ヲ告ケサル時ハ天皇ノ御政權ヲ以テ相當ノ延期ヲ勅定セラル、ナリ

本條ニハ三箇月以内ニ議事ノ決了シタル時ノ規定ナシ

ト雖此場合ニハ閉會セラル、事勿論タルヘシ

第四十三條

臨時緊急ノ必要アル場合ニ於テ常會ノ外臨時會ヲ召集スヘシ

臨時會ノ會期ヲ定ムルハ勅命ニ依ル

(註)本條ハ己ニ第八條ノ規定アリト雖トモ所謂臨時緊急之場合ニモ深淺厚薄ノ程度アルヲ以テ議會ヲ召集スルノ違アル時ハ臨時會ヲ開キ以テ可成寡人政治ヲ避ケントスルニ在リ最モ其會期ハ議案ノ輕重多寡ニ由リテ長短アル可ケンハ之ヲ豫定スル能ハス臨時勅命ニ由リテ定メラル、ナリ

第四十四條

帝國議會ノ開會閉會會期ノ延長及停會ハ兩院同時ニ之ヲ行フヘシ

衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ貴族院ハ同時ニ停會セラルヘシ

(註)帝國議會ハ貴族院衆議院ノ兩者ヨリ組織セラレタル者ニシテ單ニ一議院ノミニテハ帝國議會ト云フ能ハス
總テ第三十七條第六十二條第六十四條第六十八條第七十條以下第七十四條第一項迄ノ各議案ハ皆帝國議會即チ兩院ノ協賛ヲ經ルノ制ナレハ其開閉停會及ヒ延長等總テ同時ニ進退スヘキハ事理ノ當然ナリトス但シ停會ハ政府ニ於テ議案再調査等ノ爲メ議員法第三十三條ニ由リ十五日以内臨時議會ヲ中止スルヲ云フ

又衆議院ノ解散ヲ命セラレタル時ハ帝國議會ノ要素タル一院ヲ失ヘタル者ナレハ殘ル處ハ只貴族院ノミニノ帝國議會ハ己ニ消散シタリ故ニ貴族院ハ同時ニ停會セラル可シ然レモ此貴族院ノ停會ハ帝國議院トシテ停會セシメラル、者ナレハ仮令停會中ト雖モ單ニ貴族院ノミニノ特權即チ貴族院令第八條第九條ノ議事ヲ開クハ妨ケナシトス

第四十五條

衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ勅命ヲ以テ新ニ議員ヲ撰舉セシメ解散ノ日ヨリ五箇月以内ニ之ヲ召集スヘシ

(註)衆議院解散ヲ命セラレタル時ハ現ニ出席シタル議員

ハ勿論欠席ノ議員ト雖モ悉ク代議士タルノ資格ヲ失ヒ日本國中一人トシテ衆議院ノ議員タル者ナシ故ニ此場合ニ於テハ勅命ヲ以テ新ニ議員ヲ撰舉セシムルナリ但シ解散ノ當日ヨリ五ヶ月以内ニ之ヲ召集スル所以ハ若シ此期限ナケレハ解散ノ一年間ハ全ク帝國議會ヲ開カサルニ至ルノ恐レアレハナリ

第四十六條

兩議院ハ各々其ノ總議員三分ノ一以上出席スルニ非サレハ議事ヲ開キ議決ヲ爲スコトヲ得ス

(註)出席議員三分ノ一以下ニシテ議事ヲ開キ或ハ議決ヲ爲スニ於テハ可決スルモ否決スルモ之ヲ以テ未タ議會ノ輿論トハ認め難ク仮令未タ議決ヲ爲サス單ニ議事ニ

取掛リタルニ止マルモ其信憑ニ於テ欠クル所アルヲ以テ此制限アリ
 爰ニ一問題ノ起ルアリ若シ貴族院ニ於テハ議員三分ノ一以上出席シ衆議院ニ於テハ三分ノ一以上ニ達セサル時ハ貴族院ノミ議事ヲ開キ或ハ議決スルヲ得ルヤノ件是レナリ予以爲ラク本條ニハ其明文ナシト雖モ衆議院ニ於テハ三分ノ一以上ニ達セサルカ故ニ無論停會セラル、ヲ以テ第四十條ニ從ヒ貴族院モ共ニ停會セサル可ラス若シ己ニ貴族院ニ於テ議事ヲ開キ或ハ議決ヲ爲スモ其効ナカルヘシ

第四十七條

兩議院ノ議事ハ過半數ヲ以テ決ス可否同數ナルトキハ

議長ノ決スル所ニ依ル

(註)議會ニ於テ說ノ相分カル、場合出席議員ノ *Absolute Majority* 過半數カ一方ノ說ヘ左袒スレハ之レヲ以テ議會ノ輿論ト認メテ議決スルヲ普通ノ會議法ニシテ細大皆ナ然ラサルハナシ又可否ノ數相全シキ場合偶々某國憲法ノ如キ議案ヲ棄却スト定メタルモノナキニアラサルモ然ルルハ事ノ澁滯スル處アリ故ニ裁決ノ特權ヲ議長ニ附與スレハ敏速ニ完結スルヲ以テ各國ノ憲法率テ之ヲ採擇セルナリ

第四十八條

兩議院ノ會議ハ公開ス

但シ政府ノ要求又ハ其ノ院ノ決議ニ依リ秘密會ト爲

スエトヲ得

(註)凡ソ普通ノ知識ヲ備ヘタル者ハ審ニ其斷決而已ヲ聞キ以テ之ニ心服スル能ハス必スヤ其理由ヲ問ハントス某ノ議案可ナルカ人其何故タルヲ聞カント要シ又之ヲ否ナリトセシカ人其何故タルヤ知ラント要ス夫レ理由ナキノ裁判ハ裁判ニ非ストハ亦是レ裁判ノ上ノミナラス之ヲ議政ノ上ニ適用セサル可ラス若シ議事ヲ公開セサレハ人其可否ノ理由ヲ知ル能ハス爲メニ人心ノ疑惑ヲ誘起シ其議事ノ信憑ヲ保ツ能ハス又傍聽者ナル監察人ヲキテ以テ往々議政ノ不公平ニ陥ルヲアリ故ニ兩議員ノ會議ハ之ヲ公開スルヲ定メラレタリ然レモ此條規モ亦例外ノ必要ナルヲアリ若シ當該議事ノ傍聽ヲ

許ルスルハ治安ニ妨害アルカ若クハ小會議ヲ開ク時ノ如キハ公開却テ有害タルヲアルヘキニ山リ政府ノ請求又ハ其院ノ多數決ニ由リ傍聽ヲ禁スルヲアルヘシ是レ第三項ノ設ケアル所以ナリ去レド此第二項ニハ「云々秘密會ト爲ス」ヲ得「トアル」ニ由リ議院自ラ秘密會ト爲スニ議決シタル時ノ外政府ヨリ秘密會ト爲スヘキノ請求アルモ議院ハ必ス之ニ從フヘキノ義務アルヲナシ是レ議院ハ獨立ニシテ政府ノ支配ヲ受クヘキ者ニ非サレハナリ

第四十九條

兩議院ハ各々天皇ニ上奏スルコトヲ得

(註)兩議院ハ何事ニ限ラズ各其院ノ多數ニ由リテ議決シ

（註）臨時限議會代表スル所ノ議長ヲ以テ天皇ニ上
奏スルヲ得ヘシ其上奏ノ事柄ハ強テ立法部内ニ限ラ
ス行政ニ關スル事柄モ上奏スルニ於テ妨ケナシ但シ本
條ニ「兩議院ハ云々」トアルニ由リ實ニ議員タルノ資格ノ
ミニテハ上奏スルヲ得サルナリ

第五十條

兩議院ハ臣民ヨリ呈出スル請願書ヲ受クルコトヲ得

（註）本條ノ趣旨及ヒ其利益等ハ議院法第六十二條以下ヲ
熟讀スル時ハ自ラ明瞭ナルヲ以テ爰ニ贅セス只一ノ說
クヘキ者アリ即チ兩議院ニ臣民ノ請願ヲ受クルコトヲ許
ルニ時ハ兩議院ハ其識見眼光ノ及ハサル處ヲ補ヒ彼ノ
第三十八條第四十條ニ由リ議院自ラ法律案ヲ提出シ又

ハ法律其他ノ事件ニ付政府ニ建議スルノ方途ニ於テ大
ナル便利アリ果シテ然ル時ハ實ニ官民ノ便ナルヲ以テ
此法規アリ

第五十一條

兩議院ハ此ノ憲法及議院法ニ掲クルモノ、外内部ノ整
理ニ必要ナル諸規則ヲ定ムルコトヲ得

（註）抑モ議會ニ望ムヘキ處ハ無益ノ事ヲ省キ議事ノ周到
緻密ニシテ且ツ迅速ナルニアリ若シ内部ノ整理ニシテ
調ハサル時ハ此希望ヲ全フスル能ハス而シテ内部ノ事
ハ外部ノ干涉スヘキニ非ス其者自ラシテ處置セシム
ルノ便ナルニ若カサルヲ以テ本條ノ設ケアリ然レモ議
會ハ此憲法及ヒ附屬法並ニ他ノ法律規則等ニ抵觸スル

規則ヲ立ツルヲ得ス

第五十二條

兩議院ノ議員ハ議院ニ於テ發言シタル意見及表決ニ付
院外ニ於テ責ヲ負フコトナシ

但シ議員自ラ其ノ言論ヲ演說刊行筆記又ハ其ノ他ノ
方法ヲ以テ公布シタルトキハ一般ノ法律ニ依リ處分
セララルヘシ

(註)凡ソ議事ハ周到精密ナルヲ要ス然ニ若シモ議員ニシ
テ議場ノ發言ニ對シ刑法上誹毀侮辱ノ責ヲ負ヒ民法上
賠償ノ責ヲ擔フニ於テハ場合ニ由リ戰々恐々發言ヲ忌
ミ議政ノ職任ヲ盡ス能ハサルニ至ラザル果シテ然ルトキ
ハ議院ノ獨立ヲ失ヒ御無理御最モニ陷ルヘシ故ニ歐米

諸洲ニ於テモ夙ニ議員ハ院內ノ發言ニ就テハ院外ニ於
テ責任ナキコトヲ明言セリ是レ本條ノ依テ起ル所以ナリ
然レトモ議員ハ院外ニ於テ院內ノ發言ニ對シ責任ナキ
ノミニシテ言若シ誹毀侮辱ニ涉ル時ハ院內ニ於テ懲罰
ヲ受ク可シ「議院法第九十二條第九十三條及ヒ第九十四
條以下參看」然リ而シテ議員若シ院外ニ於テ其言論ヲ演
說刊行其他ノ方法ヲ以テ公衆ニ播布シタル時ハ是既ニ
議員ノ資格ヲ離レ一人ノ地位ヨリ爲シタル者ナレハ
當然法律上其責ニ任セサルヲ得ス即チ其演說刊行筆記
等若シ誹毀ニ涉リ或ハ官吏ノ職務ニ對シテ侮辱ヲ加ヘ
タル時ハ刑法ノ制裁ヲ受ケ又時トシテハ損害賠償ノ義
務ヲ負フコトアルヘシ

第五十三條

兩議院ノ議員ハ現行犯罪又ハ内亂外患ニ關ル罪ヲ除ク
外會期中其ノ院ノ許諾ナクシテ逮捕セラレユトナシ

(註)本條モ亦前條ト同シク議會ノ獨立ヲ保タシムルノ法
意ニ出ツ若シ夫レ會期中議員ヲ拘引スルヲ得セシメ
ハ撰舉人ハ其意思ノ代表者ヲ失ヒ撰舉者ハ罪ナクシテ
自家ノ希望ヲ却ケラル、ニ至ラン又反對黨ハ常ニ汲々
敵黨ノ微事ヲ穿テ故ラニ會期ニ到リテ告訴告發ヲ爲シ
機ニ乘シテ議會ヲ弄スルノ恐レアリ而シテ爰ニ「會期中」
トアルハ議員ノ議席ニ列シ居ル時ノミニ限ラス議會ノ
開會期限中ヲ謂ナリ故ニ仮令未ダ鞏固ノ下ニ赴カサル
モ議員タル者ハ議會發會中ハ必ス所屬議院ノ承諾ナク

シテ拘引セラレザルノ特權ヲ有スヘシ然レトモ若シ治
罪法第百條及ヒ第百一條ニ規定シタル場合ニ於テハ兩
院ノ議員ト雖モ前段説ク處ノ特權ヲ有スル能ハス直チ
ニ逮捕セラレヘシ此レ現行犯人ヲ議員タルノ故ヲ以テ
之ヲ打捨テ置ク時ニ看ス々々社會ノ秩序ヲ害シ安寧ヲ
破ル者ヲ傍觀セサルヲ得ス例ヘハ爰ニ一ノ議員ガ人ヲ
殺サントシテ己ニ一刀ヲ切り付猶進テ被害ノ首ニ亦チ
擬スルモ議員タルノ故ヲ以テ之ヲ捕縛スルヲ得ストセ
ハ實ニ不都合ノ極ナリ又内亂外患罪ハ事重大ニシテ一
分時ヲ失スレハ遂ニ百萬ノ生靈ヲ塗炭ニ陷ルニ至ル可
クレハ仮令現行犯ニ非サルモ直ニ逮捕スルヲ得セシメ
サル可カラス是本條ノ設ケアル所以ナリ

第五十四條

國務大臣及政府委員ハ何時タリトモ各議院ニ出席シ及發言スルコトヲ得

(註)國務大臣トハ内閣總理大臣及各省ノ大臣ニシテ政府委員トハ臨時撰任セラレタル主務者ヲ云フ是等ハ元ヨ行政官ニシテ立法者ニ非サレトモ主務ノ議案ニ對シテ説明ヲ爲シ又其必要ヲ論ジ議員ヲシテ其必要ヲ感悟セシムルハ施政上大ナル益アルヲ以テ此規定アリ而シテ本條ニ各議院ニ出席シ及ヒ發言スルコトヲ得トアルニ由リ國務大臣及ヒ政府委員ハ其意見ヲ陳述スル迄ニテ決議ノ數ニ加ハルコトヲ得サルナリ

第四章

國務大臣及樞密顧問

第五十五條

國務各大臣ハ天皇ヲ輔弼シ其ノ責任ニ任ス凡テ法律勅令其ノ他國務ニ關ル詔勅ハ國務大臣ノ副署ヲ要ス

(註)本條第一項ノ意義ハ左ノ如クナルヘシ

國務大臣ハ天皇ヲ輔佐シ天皇ト國家トニ對シテ其責任ヲ負フ蓋シ國務大臣ハ天皇ニ對シテ其責任アルハ論ヲ待マス又第二條ノ下ニ於テ論シタルカ如ク天皇ハ法律ノ外ニ立チ玉フ者ナレハ法律ノ支配ヲ受ケ玉ハスト雖モ國務大臣ハ政務ニ付天皇ニ對シテ非行ヲ諫止スル義務アリ果シテ然ラハ天皇ニシテ非行アラソカ是レ天皇ノ非行ニ非ス國務大臣ノ非行タルヲ免カレス故ニ國家ニ

對シテ國務大臣ハ其責ヲキテ得サルナリ
法律勅令其他國務ニ關ル詔勅ニ國務大臣ノ副署ヲ要ス
ル所以ハ天皇ノ御專裁ニ出テス主務大臣ノ翼贊ニ由ル
ヲ証シ兼テ其責任ノアル處ヲ示スナリ

第五十六條

樞密顧問ハ樞密院官制ノ定ムル所ニ依リ天皇ノ諮詢ニ
應ヘ重要ノ國務ヲ審議ス

(註)樞密顧問ハ猶各大臣ノ秘書官ニ於ケルカ如ク天皇ノ
顧問ニ備フ而シテ其執ル處ハ天皇政權ノ御施行ニ際シ
立法行政ニ係ル内外重大事件ノ御諮問ニ答フルナリ

第五章 司法

(註)司法トハ刑律ノ適用ヲ司リ及ヒ爭訟ヲ裁判スルノ謂

ニシテ即チ三大權ノ一ナリ

第五十七條

司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フ
裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

(註)司法權ハ主權ノ一大分派ニシテ天皇カ保有シ玉フ大權
ナリ人類上古ノ歴史ヲ案スルニ國君ハ大概自ラ之ニ當
リシ者ナレモ人口日々増殖シ民事事件共ニ繁劇ヲ加フ
ルヨリ竟ニ有司ニ分任シタルノ跡アリ去レハ歷史上ヨ
リスルモ道理上ヨリスルモ裁判ハ天皇ノ親裁ニ屬スヘ
キヲ各裁判所ヘ分任セラレタルニ過キサレハ各裁判所
ハ天皇ノ御名ニ於テ司法權ヲ實行スル者トス英國ニテ
ハ此趣旨ヲ表章スル爲メ宣告書ノ末文ニ「ビクト

リア女皇陛下ノ裁判官某ト附記ス蓋シ我國ニ於テモ向
 來此例ヲ取ラル、ナラン又「法律ニ依リ」トハ凡裁判ハ刑
 事ニ就テハ法律ノ正條ニ由テ判決スヘク民事ニ就テハ
 成文法ニ由リ成文法ナキ時ハ不文法不文法トハ裁判例
 又ハ一地方ノ習慣ナリ及ヒ法理ニ由リテ裁判スル旨ヲ
 示ス者ニシテ裁判所トハ高等法院大審院控訴院始審治
 安ノ兩裁判所ヲ總括シタルノ稱ナリ某新聞社説ニ於テ
 本條ヲ評論シ裁判所トハ裁判官ノ事ナリト言ヘリ是レ
 大ナル誤リニシテ取ルニ足ラス元來裁判所ナル名詞ハ二
 個ノ意義アリ一ハ其建物ヲ指シテ裁判所ト云ヘ一ハ裁
 判官檢察官書記ヲ總稱シテ裁判所ト云フ爰ニ所謂裁判
 所ハ死物ナル建物即チ役所ヲ云フニ非ラス活物ナル裁

判官檢察官書記ヨリ成リ立ツ所ノ裁判所ヲ云フ何トナ
 レハ死物ナル建物ハ裁判スル能ハサレハナリ
 裁判所ノ構成トハ其等級權限組織等ノ義ニシテ是等ハ
 一般人民ニ關スル者ナレハ別ニ法律ヲ以テ公布セラル
 ルナリ

第五十八條

裁判官ハ法律ニ定メタル資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ任
 ス
 裁判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルノ外其ノ職
 ヲ免セラル、ユトナシ
 懲戒ノ條規ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

(註)裁判官ハ貴重ナル身体財產權利ノ保護者ナレハ若シ

普通ノ人ヲ以テ之ニ任スル時ハ實ニ危險極マル者ニシテ時トシテ社會ニ對シ回復シ能ハサルノ大害ヲ被ラシムルコトアリ故ニ法律ニ於テ定メタル資格アル者ヲ以テ之ヲ任スルコトス而シテ資格トハ法律學ハ勿論一般ノ學術ニ通シ經驗アルヲ要スルノ義ナリ之ヲ本條第一項ノ解トス

又司法權ノ獨立堅固ナラスシテ行政官或ハ威權アル者ノ爲メニ左右セラル、カ如キアラハ社會モ一己人モ共ニ其權利ヲ伸張スル能ハス其身体財産ハ常ニ薄氷ノ上ニ在ルニ異ナラス之レニ由テ之ヲ視レハ司法權ノ獨立ハ一日モ忽ニス可ラサル處ナリ然ラハ如何ニセハ之ヲ獨立堅固ナラシメ得ル乎曰ク裁判官ヲシテ終身官タラ

シムルノ外ナシ己ニ終身官タルヲ得ハ彼レ強者ノ威厭ニ屈セス能ク其職ヲ盡スノ勇氣ヲ保タレ然レモ若シ刑法ノ宣告ヲ受ケ或ハ懲戒法ニ山リ懲罰ヲ受ケタル者ハ己ニ社會ノ信憑ヲ失シタル者ナレハ此貴重ナル職ニ在ラシムルヲ得ス是レ第二項ノ條規アル所以ナリ

然レモ若シ懲戒ノ條規ヲ明定セス司法大臣ノ方寸ニ仍リテ之ヲ懲罰スルカ如キ事アラハ前第一項二項ノ美法モ氷泡ニ歸スヘシ況ンヤ人心ノ異ナリ尙ホ其面ノ如ク甲ノ非トスル處乙必スシモ非ト感セサルニ尙ホ之ヲ罰シ之ヲ解職スルハ正理ニ非ス故ニ預シメ懲戒ノ法規ヲ立テ裁判官ヲシテ準行スル所アラシメントス是レ之ヲ第三項ノ趣旨トス

第五十九條

裁判ノ對審判決ハ之ヲ公開ス

但シ安寧秩序又ハ風俗ヲ害スルノ虞アルトキハ法律ニ依リ又ハ裁判所ノ決議ヲ以テ對審ノ公開ヲ停ムルコトヲ得

(註)裁判ヲ公行スルノ要ハ第四十八條ノ解説ト其趣旨ヲ同シナス讀者彼是參照セハ本條ノ法意ヲ知ルニ足ラシ故ニ贅セス

第六十條

特別裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

(註)特別裁判所トハ陸海軍ノ軍法會議、海員審問俱ニ裁判

所ノ名ナリト云フ陸海軍ノ如キハ一種特別ナル軍規ノ下ニ立ツ者ナレハ其裁判權ノ如キモ陸海軍自ラ之ヲ保有スルニ非サレハ其体面ヲ保ツ能ハサルノミナラス實際種々ノ支障ヲ生シ軍紀ヲ維持スルヲ得ス故ニ特別ニ陸海軍ニ裁判權ヲ與フルナリ又海員審問ノ如キモ普通裁判所ヲシテ之ヲ管轄セシムル能ハサル事情アリ抑モ航海法及ヒ其慣習ノ如キハ一科専門ノ技藝ナレハ普通法律學者ノ能ク適當ノ裁判ヲ下スハ到底望ム可ラサル事ナレハ法律ヲ以テ特別裁判所ノ構成權限管轄等ヲ定ムル者トス

第六十一條

行政官廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ傷害セラレタリトス

ルノ訴訟ニシテ別ニ法律ヲ以テ定メタル行政裁判所ノ
裁判ニ屬スヘキモノハ司法裁判所ニ於テ受理スルノ限
ニ在ラス

(註)行政官廳ノ違法處分トハ例ヘハ行政官吏カ法律ニ背
キ縣郡市町村又ハ其議會或ハ一己人ニ對シ爲シタル行
政上ノ處爲ヲ云フ此場合ニ於テ若シ普通裁判所ヲ以テ
管轄セシムルトセハ司法權ヲ以テ行政權ヲ凌駕シ二大
權ノ併立ヲ害スルニ至ルヘケレハ必ス別ニ行政裁判所
ノ設ケナカル可ラス是レ本條ノ制定アル所以ナリ

第六章 會計

第六十二條

新ニ租稅ヲ課シ及稅率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ之ヲ定

ムヘシ

但シ報償ニ屬スル行政上ノ手数料及其他ノ收納金ハ前
項ノ限ニ在ラス

國債ヲ起シ及豫算ニ定メタルモノヲ除ク外國庫ノ負擔
トナルヘキ契約ヲ爲スハ帝國議會ノ協賛ヲ經ヘシ

(註)租稅ハ政府ノ保護ニ報ユル代價ナシハ必ス保護ノ實
價ト稅額トハ互ニ對等ナラサル可ラス然レトモ保護ハ
元ト無形ナレハ寸尺ノ能ク度ルヘキ者ナシ故ニ只國民
ノ承諾ヲ以テ至當ノ實價ト見做スナリ故ニ新稅ヲ賦課
シ又ハ之ヲ増減スル時ハ帝國議會ノ承諾ヲ經サル可ラ
ス但シ稅率トハ租稅ノ目安ニシ地價百分ノ二分五厘或
ハ所得百分ノ一等ヲ云フ之ヲ本條第一項ノ解義トス

報償ニ屬スル行政上ノ手数料トハ版權免許料、專賣特許料、商標料ノ如キ類ニシテ其ノ他ノ收納金トハ鉄道運賃其他官業ヨリ生スル取揚金ノ類ニシテ時々變更ヲ要スル行政上ノ處分ニ屬スヘキ者ニテ是等ハ租税ノ性質ヲ備ヘサル者故帝國議會ノ干預スル處ニ非ス專ラ行政ノ權内ニテ之ヲ左右スル者トス然レモ其收納金ハ必ス決算報告ノ内ニ加フヘキ者ナリ之ヲ第二項ノ解ト爲ス内國債外國債ヲ募ルハ國民ニ負債セシムルト同一ナレハ其承諾ヲ得スシテ之ヲ爲スヘキ理由ナク又國庫ノ金ヲ以テ支拂フヘキ政府ト會社或ハ人民トノ契約ハ是亦間接ニ國民ノ負擔ニ販スル者ナレハ其承諾ヲ需メサル可ラス故ニ此二者ハ必ス帝國議會ノ協賛ヲ經ヘキ者ト

ス是レ第三項ノ趣旨ナリ

第六十三條

現行ノ租税ハ更ニ法律ヲ以テ之ヲ改メサル限ハ舊ニ依リ之ヲ徵收ス

(註)帝國議會ヲ開設スルノ曉キト雖モ舊來ノ法律規則ヲ消滅セシムル者ニ非ス之ヲ改正セサル限リハ依然其効力ヲ有スルカ故ニ税法ノ如キモ改正ナキ間ハ幾百年モ舊ニ由リテ徵收スルハ當然ナリ

第六十四條

國家ノ歲出歲入ハ毎年豫算ヲ以テ帝國議會ノ協賛ヲ經ヘシ

豫算ノ款項ニ超過シ又ハ豫算ノ外ニ生シタル支出アル

トキハ後日帝國議會ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス

(註)國庫金ハ一厘ヲリトモ國民ヨリ出テサル者ナシ左ス
レハ政府ノ經濟ハ裏面ヨリ之ヲ見ル時ハ國民ノ經濟ニ
版ス故ニ歳出入ハ國民ノ代表者タル帝國議會ノ承諾ヲ
求メサル可ラス而シテ社會ハ活物ナレハ悉ク人ノ豫想
ニ違ハサルハ難ク時々意外ノ經費ヲ要スル事アリ此場
合ニ於テハ他日必ス帝國議會ノ追認ヲ求ムヘキ者トス
然レモ豫算外ノ費用巨額ヲ要スルニ至リタル時ハ必ス
第四十三條ノ規定ニ由リ臨時帝國議會ヲ召集セラル可
シ

第六十五條

豫算ハ前ニ衆議院ニ提出スヘシ

(註)英米其他ノ立憲國ニ於テハ經濟上ノ議案ハ下院先ツ
之ヲ議決シ上院ハ只其大体ニ就キ可否スルノミトス我
國ノ衆議院ハ所謂下院ナルヲ以テ本條ノ定メアリ蓋シ
衆議院ハ能ク國民ノ貧富苦樂等ノ情況ニ通シタル議員
ヨリ成立スレハナリ

第六十六條

皇室經費ハ現在ノ定額ニ依リ毎年國庫ヨリ之ヲ支出シ
將來増額ヲ要スル場合ヲ除外帝國議會ノ協賛ヲ要セ
ス

(註)皇室費ハ他ノ經費ト同一視ス可カラス其増減ハ天皇
ノ御尊榮ト日本帝國榮辱ノ消長ニ關スル大ナルハ臣民
タル者ハ寧ロ其増額ヲ希フモ輕減ヲ好マサルヘシ而シ

テ明治二十二年度ノ皇室費豫算ハ三百萬圓ナリトス然
シ之ヲ帝國議會ノ議ニ付セサルノ趣旨ハ第六十二條第
七十四條各第一項ノ下ニ於テ論シタル處ト畧ホ同一ナ
リトス然レトモ向來増額ヲ要スル時ハ元ヨリ國庫ノ負
擔ヲ重クスル者ナレハ帝國議會ノ協賛ヲ求メラル、ナ
リ

第六十七條

憲法上ノ大權ニ基ツケル既定ノ歳出及法律ノ結果ニ由
リ又法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出ハ政府ノ同意ナク
シテ帝國議會之ヲ廢除シ又ハ削減スルユトヲ得ス

(註)憲法上ノ大權ニ基ツケル既定ノ歳出「トハ第一章ノ第
十條第十五條等ノ場合ニシテ帝國議會ニ附シタル歳出

表ノ内ニ明示スル者ヲ云ヘ「法律ノ結果ニ由リ又ハ法律
上政府ノ義務ニ屬スル歳出」トハ例ヘハ訴訟法又ハ裁判
所構成法ノ發布ニ付之ヲ實行スル爲メ當然ニ要スル經
費ハ即チ法律ノ結果ニ由ルノ歳出ニシテ又政府カ管テ
郵便物ノ爲メニ汽船會社ト契約シタル補助金ノ如キハ
即チ政府ノ義務ニ屬スル歳出ナリトス是等ノ費用ヲ帝
國議會ニ於テ政府ノ承諾ナクシテ全廢又ハ削減スルニ
於テハ施政ノ機關全ク其運轉ヲ抑止セラレ行政權ノ獨
立ヲ害スルニ至ルヲ以テ本條ノ規定アル所以ナリ

第六十八條

特別ノ須要ニ因リ政府ハ豫メ年限ヲ定メ繼續費トシテ
帝國議會ノ協賛ヲ求ムルユトヲ得

(註)特別ノ須要トハ一事業ノ上ニ要スル經費ナリ例ヘハ
 某鐵道ヲ終極迄何百萬圓某所ノ築港ニ何十萬圓ヲ要ス
 ルカ如シ是等ハ數年ノ後チニ竣功ヲ告クルコト多クレ
 ハ年々同一ノ議案ヲ議會ニ附スルハ實ニ無益ノ手數ナ
 ルノミナラス其事業ハ會計年度ノ來ル毎ニ議案ノ運命
 ナ眺メテ澁滯シ頗ル不都合ノ事アルヘキニ依リ豫シメ
 繼續費トシ幾年間ニ幾百萬圓ヲ支出スルノ議案ヲ提出
 シ毎年同一ノ手數ヲ省キ以テ事業ノ即成ヲ圖ル是レ政
 府ニ取リテモ帝國議會ニ取リテモ共ニ便ナル方法ナリ
 トス

第六十九條

避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フ爲ニ又ハ豫算ノ外ニ

生シタル必要ノ費用ニ充ツル爲ニ豫備費ヲ設クヘシ

(註)經濟上ノ事タル必スシモ豫算ノ如ク成リ行ク者ニ非
 ス又必ス豫算外ノ金額生セサルヲ期スル能ハサルハ人
 々日常ノ經驗ニ照シテ明カナリ一己人已ニ然リ況ンヤ
 一國チヤ然ラハ之ニ備フルノ計策ナカル可ラス是レ本
 案豫備費ヲ設定セシムル所以ナリ

第七十條

公共ノ安全ヲ保持スル爲緊急ノ需用アル場合ニ於テ内
 外ノ情形ニ因リ政府ハ帝國議會ヲ召集スルユト能ハサ
 ルトキハ勅令ニ依リ財政上必要ノ處分ヲ爲スユトヲ
 得

前項ノ場合ニ於テハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出シ

其ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス

(註)非常ノ天變其他内乱外寇等ノ場合ニ當リテハ政府ノ義務トシテ公衆ノ身体財産ヲ保護セサル可ラス此場合ニ於テ臨時支拂ノ爲メニ帝國議會ヲ召集スル恐クハ難シ然ル時ハ政府ヲシテ直ニ銀行ヨリ金員ヲ借り入若クハ紙幣ヲ増發スル等臨機ノ處置ヲ爲スノ權ヲ有セシメサル可ラス然レモ是レ止ムヲ得サルニ出テタル變則ナレハ次年ノ帝國議會ヲ開會スルニ當リテハ其追認ヲ要スル者ト定メラレタルナリ

第七十一條

帝國議會ニ於テ豫算ヲ議定セス又ハ豫算成立ニ至ラサルトキハ政府ハ前年度ノ豫算ヲ施行スヘシ

(註)豫算ヲ議定セストハ帝國議會解散ヲ命セラル、カ或ハ議事ニ入ルノ前ニ於テ紛擾ヲ生シ可否ノ決ニ至ラスシテ止ミタル場合ヲ云ヘ豫算成立ニ至ラストハ豫算修正ノ動議數派ニ分カレ結局何レモ其說ノ成リ立タサルヲ云フ此場合ニ於テハ原案修正說共ニ消滅シタル者ナレハ政府ハ前年度ノ議會ニ附シテ施行シタル豫算ヲ繼續スルノ外ナシ是レ實ニ止ムヲ得サルナリ

第七十二條

國家ノ歳出歳入ノ決算ハ會計検査員之ヲ検査確定シ政府ハ其ノ検査報告ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ會計検査院ノ組織及職權ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

(註)本條ハ第六十二條ト相待テ完全ノ効能ヲ現スル者ナ

リ夫レ歳出歳入ハ國民ノ經濟ニシテ政府ノ專斷ニ皈ス
 ヘキ者ニアラス故ニ其支拂ノ決算不當ナルヲ等アラハ
 帝國議會ハ政府ニ向テ訂正ヲ求ムルノ權アリ」第四十條
 参考」加之決算過不足ハ國民ノ利害ニ關ハル大ナレハ帝
 國議會ハ其決算報告ヲ受クルノ權アリ從テ政府ハ之ヲ
 報告スルノ義務アリ而シテ會計検査院ノ検査ヲ經テ報
 告セシムルハ其確實ナルヲ証明スルニ在リ
 會計検査院ハ經濟上ニ付政府ノ決算當否ヲ檢察スル者
 ナレハ其組織ノ良否ト職權ノ輕重トハ實ニ國家ノ運命
 ニ關スル重大ノ事柄ナルニ由リ特ニ法律ヲ以テ之ヲ定
 ムル者トス

第七章

補則

第七十三條

將來此ノ憲法ノ條項ヲ改正スルノ必要アルトキハ勅命
 ヲ以テ議案ヲ帝國議會ノ議ニ付スヘシ此場合ニ於テ兩
 議員ハ各々其ノ總員三分ノ二以上出席スルニ非サレハ
 議事ヲ開クコトヲ得ス出席議員三分ノ二以上ノ多數ヲ
 得ルニ非サレハ改正ノ議決ヲ爲スコトヲ得ス

(註)此憲法ハ所謂欽定憲法ナレハ帝國議會モ又政府自ラ
 モ刪除追加等ノ議案ヲ提出スルヲ許サス其必要アルニ
 臨テハ勅命ヲ以テ議案ヲ發シ帝國議會ノ議ニ附セラル
 ル者トス

憲法ノ改正ハ實ニ天皇ノ大權ト國家ノ利害ニ絶大ナル
 關係ヲ有スル者ナレハ帝國議會普通會議ノ節ハ出席議

員三分ノ一以上ニ達スレハ直ニ開會シ過半数ヲ以テ議決スルト雖モ本條ノ場合ニ限り議員三分ノ二以上ノ出席ヲ要シ又其現ニ出席シタル議員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニ非サレハ改正ノ議決ヲ爲スヲ能ハス是レ務メテ輿論ニ近ツカシムルヲ要スレハナリ

第七十四條

皇室典範ノ改正ハ帝國議會ノ議ヲ經ルヲ要セス

皇室典範ヲ以テ此憲法ノ條規ヲ變更スルヲ得ス

(註)皇室ノ御事ニ付臣民ノ喙ヲ容ル、アラハ竟ニハ其尊榮ヲ瀆シ時ニ或ハ源平相爭ノ故事ヲ惹起スルモ計リ難ク又皇室典範ヲ帝國議會ニ附スル者ナラシメハ恐レ多クモ帝國議會ハ皇室ヲ左右スルノ權力アル者ト言ハ

サル可ラス果シテ然ラハ皇室ノ御尊榮ハ何ニ由リテ保ツヲ得ヘケンヤ是レ皇室典範ノ御改正ハ帝國議會ニ附シ玉ハサル所以ニシテ實ニ至當ノ御事ト申スヘシ右ノ如ク皇室典範ト此憲法トハ斷然關係ヲ絶チ切り皇室典範ハ帝國議會ノ議ニ附セラレサル者ナレハ其議會ニ附セサル典範ヲ以テ此憲法ノ條規ヲ動かサルハ事アラハ實ニ不條理ノ事ニシテ此憲法ハ有名無實ノ者トナリ帝國議會ハ一ノ玩弄物タルニ至ル可ケレハ斷然第二項ノ規定ヲ立テラレタルナリ

第七十五條

憲法及皇室典範ハ攝政ヲ置クノ間之ヲ變更スルユトヲ得ス

(註)憲法ノ改正ハ天皇ノ勅命ニ由リテ帝國議會ニ附シ皇
室典範ノ改正モ是亦天皇ノ勅命ヲ以テ皇族會議ニ附セ
ラル可キ者ナレハ天皇ノ御幼冲等ニテ攝政ノ置カル、
間ハ眞ノ御親裁ナル者ナケレハ此重大ナル改正ヲ爲ス
ハ皇室ノ尊嚴ヲ侵シ奉ルニ到ルヲ以テ之ヲ爲ス能ハサ
ルナリ

第七十六條

法律規則命令又ハ何等ノ名稱ヲ用井タルニ拘ラス此ノ
憲法ニ矛盾セサル現行ノ法令ハ總テ遵由ノ効力ヲ有
ス

歲出上政府ノ義務ニ係ル現在ノ契約又ハ命令ハ總テ第
六十七條ノ例ニ依ル

(註)憲法實施ノ期ニ至ルモ舊來ノ法律規則等ハ決シテ消
滅スル者ニ非ラス屢手トシテ其効力ヲ有スルナリ其理
由ハ已ニ第六十三條ノ下ニ解説セリ

帝國議會開會ノ後チハ第六十四條ノ條規ニ依リ政府ノ
歲出歲入ハ必ス毎年豫算ヲ以テ帝國議會ノ協賛ヲ經サ
レハ政府ハ之ヲ支出スルノ權ナシ然レモ帝國議會開會
以前ヨリ存シタル政府ト會社若クハ人民トノ間ニ成リ
立チタル契約ハ政府必ス之ヲ履行スルノ義務アリ例ヘ
ハ政府ガ郵船會社ニ對シ郵便物搭載ノ事ニ付之ニ約シ
タル手當テ金又ハ私設鐵道會社ニ政府ガ與ヘタル利子
ノ保證金等ハ其期限間ニ法律ノ改正アリタルカ爲メニ
其義務ノ消散スル者ニ非サルヲ以テ之カ支拂ヲ爲サ、

ル可ラス由テ是等ハ帝國議會ヲ協贊ヲ經ス直ニ支拂ヲ爲スヘキ者トス但シ其決算ハ必ス帝國議會ニ報告セラ
ルヘキナリ

大日本帝國憲法精義終

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ議院法ヲ裁可シ之ヲ公布セシ
メ併セテ貴族院及衆議院成立ノ日ヨリ各々本法ニ依リ
施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

明治二十二年二月十一日

- 内閣總理大臣 伯爵黑田清隆
- 樞密院議長 伯爵伊藤博文
- 外務大臣 伯爵大隈重信
- 海軍大臣 伯爵西郷從道
- 農商務大臣 伯爵井上馨
- 司法大臣 伯爵山田顯義
- 大藏大臣兼內務大臣 伯爵松方正義
- 陸軍大臣 伯爵大山巖
- 文部大臣 伯爵森有禮
- 遞信大臣 伯爵榎本武揚

法律第二號

議院法

第一章

帝國議會ノ召集成立及開會

第一條 帝國議會召集ノ勅諭ハ集會ノ期日ヲ定メ少ク

トモ四十日前ニ之ヲ發布スヘシ

第二條 議員ハ召集ノ勅諭ニ指定シタル期日ニ於テ各

議院ノ會堂ニ集會スヘシ

第三條 衆議院ノ議長副議長ハ其ノ院ニ於テ各々三名

ノ候補者ヲ選舉セシメ其ノ中ヨリ之ヲ勅任スヘシ

議長副議長ノ勅任セラレ、マテハ書記官長議長ノ職

務ヲ行フヘシ

第四條 各議院抽籤法ニ依リ總議員ヲ數部ニ分割シ每

部々長一名ヲ部員中ニ於テ互選スヘシ

第五條 兩議院成立シタル後勅命ヲ以テ帝國議會開會

ノ日ヲ定メ兩院議員ヲ貴族院ニ會合セシメ開院式ヲ

行フヘシ

第六條 前條ノ場合ニ於テ貴族院議長ハ議長ノ職務ヲ

行フヘシ

第二章 議長書記官及經費

第七條 各議院ノ議長副議長ハ各々一員トス

第八條 衆議院ノ議長副議長ノ任期ハ議員ノ任期ニ依

ル

第九條 衆議院ノ議長副議長辭職又ハ其ノ他ノ事故ニ

由リ關位トナリタルトキハ繼任者ノ任期ハ仍前任者

ノ任期ニ依ル
第十條 各議院ノ議長ハ其ノ議院ノ秩序ヲ保持シ議事
ヲ整理シ院外ニ對シ議院ヲ代表ス

第十一條 議長ハ議會閉會ノ間ニ於テ仍其ノ議院ノ事
務ヲ指揮ス

第十二條 議長ハ常任委員會及特別委員會ニ臨席シ發
言スルコトヲ得但シ表決ノ數ニ預カラス

第十三條 各議院ニ於テ議長故障アルトキハ副議長之
ヲ代理ス

第十四條 各議院ニ於テ議長副議長俱ニ故障アルトキ
ハ假議長ヲ選舉シ議長ノ職務ヲ行ハシムヘシ

第十五條 各議院ノ議長副議長ハ任期限ニ達スルモ

後任者ノ勅任セラレマテハ仍其ノ職務ヲ繼續スヘ
シ

第十六條 各議院ニ書記官長一人書記官數人ヲ置ク

書記官長ハ勅任トシ書記官ハ委任トス

第十七條 書記官長ハ議長ノ指揮ニ依リ書記官ノ事務

ヲ提理シ公文ニ署名ス

書記官ハ議事録及其ノ他ノ文書案ヲ作り事務ヲ掌理

ス

書記官ノ外他ノ必要ナル職員ハ書記官長之ヲ任ス

第十八條 兩議院ノ經費ハ國庫ヨリ之ヲ支出ス

第三章 議長副議長及議員歳費

第十九條 各議院ノ議長ハ歳費トシテ四千圓副議長ハ

二千圓貴族院ノ被選及勅任議員及衆議院ノ議員ハ八
百圓ヲ受ケ別ニ定ムル所ノ規則ニ從ヒ旅費ヲ受ク但
シ召集ニ應セサル者ハ歳費ヲ受クルコトヲ得ス
議長副議長及議員ハ歳費ヲ辭スルコトヲ得ス
官吏ニシテ議員タル者ハ歳費ヲ受クルコトヲ得ス
第二十五條ノ場合ニ於テハ第一項歳費ノ外議院ノ定
ムル所ニ依リ一日五圓ヨリ多カラサル手當ヲ受ク

第四章 委員

第二十條 各議院ノ委員ハ全院委員常任委員及特別委
員ノ三類トス

全院委員ハ議院ノ全員ヲ以テ委員ト爲スモノトス
常任委員ハ事務ノ必要ニ依リ之ヲ數科ニ分割シ負擔

ノ事件ヲ審査スル爲ニ各部ニ於テ同數ノ委員ヲ總議
員中ヨリ選舉シ一會期中其ノ任ニ在ルモノトス
特別委員ハ一事件ヲ審査スル爲ニ議院ノ選舉ヲ以テ
特ニ付託ヲ受クルモノトス

第二十一條 全院委員長ハ一會期コトニ開會ノ始ニ於
テ之ヲ選舉ス

常任委員長及特別委員長ハ各委員會ニ於テ之ヲ互選
ス

第二十二條 全院委員會ハ議院三分ノ一以上常任委員
會及特別委員會ハ其ノ委員半數以上出席スルニ非サ
レハ議事ヲ開キ議決ヲ爲スコトヲ得ス

第二十三條 常任委員會及特別委員會ハ議員ノ外傍聽

ヲ禁ス但シ委員會ノ決議ニ由リ議員ノ傍聴ヲ禁スル
コトヲ得

第二十四條 各委員長ハ委員會ノ經過及結果ヲ議院ニ
報告スヘシ

第二十五條 各議院ハ政府ノ要求ニ依リ又ハ其ノ同意
ヲ經テ議會閉會ノ間委員ヲシテ議案ノ審査ヲ繼續セ
シムルコトヲ得

第五章 會議

第二十六條 各議院ノ議長ハ議事日程ヲ定メテ之ヲ議
院ニ報告ス
議事日程ハ政府ヨリ提出シタル議案ヲ先ニスヘシ但
シ他ノ議事緊急ノ場合ニ於テ政府ノ同意ヲ得ルト

キハ此ノ限ニ在ラス

第二十七條 法律ノ議案ハ三讀會ヲ經テ之ヲ議決スヘ
シ但シ政府ノ要求若ハ議員十人以上ノ要求ニ由リ議
院ニ於テ出席議員三分ノ二以上ノ多數ヲ以テ可決シ
タルトキハ三讀會ノ順序ヲ省畧スルコトヲ得

第二十八條 政府ヨリ提出シタル議案ハ委員ノ審査ヲ
經スシテ之ヲ議決スルコトヲ得ス但シ緊急ノ場合ニ
於テ政府ノ要求ニ由ルモノハ此ノ限ニ在ラス

第二十九條 凡テ議案ヲ發議シ及議院ノ會議ニ於テ議
案ニ對シ修正ノ動議ヲ發スルモノハ二十人以上ノ贊
成アルニ非サレハ議題ト爲スコトヲ得ス

第三十條 政府ハ何時タリトモ既ニ提出シタル議案ヲ

修正シ又ハ撤回スルコトヲ得

第三十一條 凡テ議案ハ最後ニ議決シタル議院ノ議長

ヨリ國務大臣ヲ經由シテ之ヲ奏上スヘシ

但シ兩議院ノ一ニ於テ提出シタル議案ニシテ他ノ議

院ニ於テ否決シタルトキハ第五十四條第二項ノ規定

ニ依ル

第三十二條 兩議院ノ議決ヲ經テ奏上シタル議案ニシ

テ裁可セララル、モノハ次ノ會期マテニ公布セララルヘ

シ

第六章 停會閉會

第三十三條 政府ハ何時タリトモ十五日以内ニ於テ議

院ノ停會ヲ命スルコトヲ得

議院停會ノ後再ヒ開會シタルトキハ前會ノ議事ヲ繼
續スヘシ

第三十四條 衆議院ノ解散ニ依リ貴族院ニ停會ヲ命シ

タル場合ニ於テハ前條第二項ノ例ニ依ラス

第三十五條 帝國議會閉會ノ場合ニ於テ議案建議請願

ノ議決ニ至ラサルモノハ後會ニ繼續セス但シ第二十

五條ノ場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラス

第三十六條 閉會ハ勅命ニ由リ兩議院合會ニ於テ之ヲ

舉行スヘシ

第七章 祕密會議

第三十七條 各議院ノ會議ハ左ノ場合ニ於テ公開ヲ停

ムルコトヲ得

一 議長又ハ議員十人以上ノ發議ニ由リ議院之ヲ可決シタルトキ

二 政府ヨリ要求ヲ受ケタルトキ

第三十八條 議長又ハ議員十人以上ヨリ祕密會議ヲ發議シタルトキハ議長ハ直ニ傍聽人ヲ退去セシメ討論ヲ用ヰスシテ可否ノ決ヲ取ルヘシ

第三十九條 祕密會議ハ刊行スルコトヲ許サス

第八章 豫算案ノ議定

第四十條 政府ヨリ豫算案ヲ衆議院ニ提出シタルトキハ豫算委員ハ其ノ院ニ於テ受取リタル日ヨリ十五日以内ニ審査ヲ終リ議院ニ報告スヘシ

第四十一條 豫算案ニ就キ議院ノ會議ニ於テ修正ノ動

議ヲ發スルモノハ三十人以上ノ賛成アルニ非サレハ議題ト爲スコトヲ得ス

第九章 國務大臣及政府委員

第四十二條 國務大臣及政府委員ノ發言ハ何時タリトモ之ヲ許スヘシ但シ之カ爲ニ議員ノ演說ヲ中止セシムルコトヲ得ス

第四十三條 議院ニ於テ議案ヲ委員ニ付シタルトキハ國務大臣及政府委員ハ何時タリトモ委員會ニ出席シ意見ヲ述フルコトヲ得

第四十四條 委員會ハ議長ヲ經由シテ政府委員ノ説明ヲ求ムルコトヲ得

第四十五條 國務大臣及政府委員ハ議員タル者ヲ除ク

外議院ノ會議ニ於テ表決ノ數ニ預カラス
第四十六條 常任委員會又ハ特別委員會ヲ開クトキハ
每會委員長ヨリ其ノ主任ノ國務大臣及政府委員ニ報
知スヘシ

第四十七條 議事日程及議事ニ關ル報告ハ議員ニ分配
スルト同時ニ之ヲ國務大臣及政府委員ニ送付スヘシ

第十章 質問

第四十八條 兩議員ノ議員政府ニ對シ質問ヲ爲サムト
スルトキハ三十人以上ノ賛成者アルヲ要ス
質問ハ簡明ナル主意書ヲ作り賛成者ト共ニ連署シテ
之ヲ議長ニ提出スヘシ

第四十九條 質問主意書ハ議長之ヲ政府ニ轉送シ國務

大臣ハ直ニ答辯ヲ爲シ又ハ答辯スヘキ期日ヲ定メ若
答辯ヲ爲サ、ルトキハ其ノ理由ヲ示明スヘシ

第五十條 國務大臣ノ答辯ヲ得又ハ答辯ヲ得サルトキ
ハ質問ノ事件ニ付議員ハ建議ノ動議ヲ爲スヲ得

第十一章 上奏及建議

第五十一條 各議院上奏セムトスルトキハ文書ヲ奉呈
シ又ハ議長ヲ以テ總代トシ謁見ヲ請ヒ之ヲ奉呈スル
コトヲ得

各議院ノ建議ハ文書ヲ以テ政府ニ呈出スヘシ
第五十二條 各議院ニ於テ上奏又ハ建議ノ動議ハ三十
人以上ノ賛成アルニ非サレハ議題ト爲スコトヲ得ス

第十二章 兩議院關係

第五十三條 豫算ヲ除ク外政府ノ議案ヲ付スルハ兩議院ノ内何レヲ先ニスルモ便宜ニ依ル

第五十四條 甲議院ニ於テ政府ノ議案ヲ可決シ又ハ修正シテ議決シタルトキハ乙議院ニ之ヲ移スヘシ乙議院ニ於テ甲議院ノ議決ニ同意シ又ハ否決シタルトキハ之ヲ奏上スルト同時ニ甲議院ニ通知スヘシ
乙議院ニ於テ甲議院ノ提出シタル議案ヲ否決シタルトキハ之ヲ甲議院ニ通知スヘシ

第五十五條 乙議院ニ於テ甲議院ヨリ移シタル議案ニ對シ之ヲ修正シタルトキハ之ヲ甲議院ニ回付スヘシ
甲議院ニ於テ乙議院ノ修正ニ同意シタルトキハ之ヲ奏上スルト同時ニ乙議院ニ通知スヘシ若之ニ同意セ

サルトキハ兩院協議會ヲ開クコトヲ求ムヘシ
甲議院ヨリ協議會ヲ開クコトヲ求ムルトキハ乙議院ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第五十六條 兩議院協議會ハ兩議院ヨリ各々十人以下同數ノ委員ヲ選舉シ會同セシム委員ノ協議案成立スルトキハ議案ヲ政府ヨリ受取り又ハ提出シタル甲議院ニ於テ先ツ之ヲ議シ次ニ乙議院ニ移スヘシ
協議會ニ於テ成立シタル成案ニ對シテハ更ニ修正ノ動議ヲ爲スコトヲ許サス

第五十七條 國務大臣政府委員及各議院ノ議長ハ何時タリトモ兩院協議會ニ出席シテ意見ヲ述ブルトヲ得

第五十八條 兩院協議會ハ傍聽ヲ許サス

第五十九條 兩院協議會ニ於テ可否ノ決ヲ取ルハ無名

投票ヲ用ヰ可非同數ナルモハ議長ノ決スル所ニ依ル

第六十條 兩院協議會ノ議長ハ兩議院協議委員ニ於テ

各一員ヲ互選シ每會更代シテ席ニ當ラシムヘシ其ノ

初會ニ於ケル議長ハ抽籤法ヲ以テ之ヲ定ム

第六十一條 本章ニ定ムル所ノ外兩議院交渉事務ノ規

程ハ其ノ協議ニ依リ之ヲ定ムヘシ

第十三章 請願

第六十二條 各議院ニ呈出スル人民ノ請願書ハ議員ノ

紹介ニ依リ議院之ヲ受取ルヘシ

第六十三條 請願書ハ各議院ニ於テ請願委員ニ付シ之

ヲ審査セシム

請願委員請願書ヲ以テ規程ニ合ハスト認ムルトキハ

議長ハ紹介ノ議員ヲ經テ之ヲ却下スヘシ

第六十四條 請願委員ハ請願文書表ヲ作り其ノ要領ヲ

録シ每週一回議院ニ報告スヘシ

請願委員特別ノ報告ニ依レル要求又ハ議員三十人以

上ノ要求アルトキハ各議院ハ其ノ請願事件ヲ會議ニ

付スヘシ

第六十五條 各議院ニ於テ請願ノ採擇スヘキコトヲ議

決シタルトキハ意見書ヲ附シ其ノ請願書ヲ政府ニ送

付シ事宜ニ依リ報告ヲ求ムルコトヲ得

第六十六條 法律ニ依リ法人ヲ認メラレタル者ヲ除ク

外總代名義ヲ以テスル請願ハ各議院之ヲ受クルコトヲ得ス

第六十七條 各議院ハ憲法ヲ變更スルノ請願ヲ受クルコトヲ得ス

第六十八條 請願書ハ總テ哀願ノ體式ヲ用ウヘシ若請願ノ名義ニ依ラス若クハ其ノ體式ニ違フモノハ各議院之ヲ受クルコトヲ得ス

第六十九條 請願書ニシテ皇室ニ對シ不敬ノ語ヲ用井政府又ハ議院ニ對シ侮辱ノ語ヲ用井ルモノハ各議院之ヲ受クルコトヲ得ス

第七十條 各議院ハ司法及行政裁判ニ干預スルノ請願ヲ受クルコトヲ得ス

第七十一條 各議院ハ各別ニ請願ヲ受ケ相互ニ干預セズ

第十四章 議院ト人民及官廳地方議會トノ關係

第七十二條 各議院ハ人民ニ向テ告示ヲ發スルコトヲ得ス

第七十三條 各議院ハ審査ノ爲ニ人民ヲ召喚シ及議員ヲ派出スルコトヲ得ス

第七十四條 各議院ヨリ審査ノ爲ニ政府ニ向テ必要ナル報告又ハ文書ヲ求ムルトキハ政府ハ祕密ニ涉ルモノヲ除ク外其ノ求ニ應スヘシ

第七十五條 各議院ハ國務大臣及政府委員ノ外他ノ官廳及地方議會ニ向テ照會往復スルコトヲ得ス

第十五章 退職及議員資格ノ異議

第七十六條 衆議院ノ議員ニシテ貴族院議員ニ任セラレ又ハ法律ニ依リ議員タルコトヲ得サル職務ニ任セラレタルトキハ退職者トス

第七十七條 衆議院ノ議員ニシテ選舉法ニ記載シタル被選ノ資格ヲ失ヒタルトキハ退職者トス

第七十八條 衆議院ニ於テ議員ノ資格ニ付異議ヲ生シタルトキハ特ニ委員ヲ設ケ時日ヲ期シ之ヲ審査セシメ其ノ報告ヲ待テ之ヲ議決スヘシ

第七十九條 裁判所ニ於テ當選訴訟ノ裁判手續ヲ爲シタルモノハ衆議院ニ於テ同一事件ニ付審査スルコトヲ得ス

第八十條 議員其ノ資格ヲキコトヲ證明セラル、ニ至ルマテハ議院ニ於テ位列及發言ノ權ヲ失ハス但シ自身ノ資格審査ニ關ル會議ニ對シテハ辯明スルコトヲ得ルモ其ノ表決ニ預カルコトヲ得ス

第十六章 請暇辭職及補闕

第八十一條 各議院ノ議長ハ一週間ニ超エサル議員ノ請暇ヲ許可スルコトヲ得其ノ一週間ニ超ユルノモハ議院ニ於テ之ヲ許可ス期限ナキモノハ之ヲ許可スルコトヲ得ス

第八十二條 各議院ノ議員ハ正當ノ理由ヲ以テ議長ニ届出スシテ會議又ハ委員會ニ闕席スルコトヲ得ス

第八十三條 衆議院ハ議員ノ辭職ヲ許可スルコトヲ得

第八十四條 何等ノ事由ニ拘ラス衆議院議員ニ闕員ヲ生シタルトキハ議長ヨリ内務大臣ニ通牒シ補闕選舉ヲ求ムヘシ

第十七章 紀律及警察

第八十五條 各議院開會中其ノ紀律ヲ保持セムカ爲内
部警察ノ權ハ此ノ法律及各議院ニ於テ定ムル所ノ規則ニ從ヒ議長之ヲ施行ス

第八十六條 各議院ニ於テ要スル所ノ警察官吏ハ政府
之ヲ派出シ議長ノ指揮ヲ受ケシム

第八十七條 會議中議員此ノ法律若ハ議事規則ニ違ヒ
其ノ他議場ノ秩序ヲ紊ルトキハ議長ハ之ヲ警戒シ又
ハ制止シ又ハ發言ヲ取消サシム命ニ從ハサルトキハ

議長ハ當日ノ會議ヲ終ルマテ發言ヲ禁止シ又ハ議場
ノ外ニ退去セシムルコトヲ得

第八十八條 議場騷擾ニシテ整理シ難キトキハ議長ハ
當日ノ會議ヲ中止シ又ハ之ヲ閉ツルコトヲ得

第八十九條 傍聽人議場ノ妨害ヲ爲ス者アルトキハ議
長ハ之ヲ退場セシメ必要ナル場合ニ於テハ之ヲ警察
官廳ニ引渡サシムルコトヲ得

傍聽席騷擾ナルトキハ議長ハ總テノ傍聽人ヲ退場セ
シムルコトヲ得

第九十條 議場ノ秩序ヲ紊ル者アルトキハ國務大臣政
府委員及議員ハ議長ノ注意ヲ喚起スルコトヲ得

第九十一條 各議院ニ於テ皇室ニ對シ不敬ノ言語論說

ヲ爲スコトヲ得ス

第九十二條 各議院ニ於テ無禮ノ語ヲ用ヰルコトヲ得ス及他人ノ身上ニ涉リ言論スルコトヲ得ス

第九十三條 議院又ハ委員會ニ於テ誹毀侮辱ヲ被リタル議員ハ之ヲ議院ニ訴ヘテ處分ヲ求ムヘシ私ニ相報復スルコトヲ得ス

第十八章 懲罰

第九十四條 各議院ハ其ノ議員ニ對シ懲罰ノ權ヲ有ス
第九十五條 各議院ニ於テ懲罰事犯ヲ審査スル爲ニ懲罰委員ヲ設ク

懲罰事犯アルトキハ議長ハ先ツ之ヲ委員ニ付シ審査セシメ議院ノ議ヲ經テ之ヲ宣告ス

各委員會又ハ各部ニ於テ懲罰事犯アルトキハ委員長又ハ部長ハ之ヲ議長ニ報告シ處分ヲ求ムヘシ

第九十六條 懲罰ハ左ノ如シ

- 一 公開シタル議場ニ於テ籠責ス
- 二 公開シタル議場ニ於テ適當ノ謝辭ヲ表セシム
- 三 一定ノ時間出席ヲ停止ス
- 四 除名

衆議院ニ於テ除名ハ出席議員三分ノ二以上ノ多數ヲ以テ之ヲ決スヘシ

第九十七條 衆議院ハ除名ノ議員再選ニ當ル者ヲ拒ムコトヲ得ス

第九十八條 議員ハ二十人以上ノ賛成ヲ以テ懲罰ノ動

議ヲ爲スコトヲ得
懲罰ノ勳議ハ事犯アリシ後三日以内ニ之ヲ爲スヘシ
第九十九條 議員正當ノ理由ナクシテ勅諭ニ指定シタル期日後一週間内ニ召集ニ應セサルニ由リ又ハ正當ノ理由ナクシテ會議又ハ委員會ニ闕席スルニ由リ若ハ請暇ノ期限ヲ過キタルニ由リ議長ヨリ特ニ招狀ヲ發シ其ノ招狀ヲ受ケタル後一週間内ニ仍故ナク出席セサル者ハ貴族院ニ於テハ其ノ出席ヲ停止シ上奏シテ勅裁ヲ請フヘク衆議院ニ於テハ之ヲ除名スヘシ

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ衆議院議員選舉法及附録ヲ裁可シ之ヲ公布セシメ併セテ帝國議會ヲ召集スルノ年ヨリ本法ニ依リ選舉ヲ施行セシムヘキコトヲ命ス

御名 御璽

明治二十二年二月十一日

- | | |
|-----------|--------|
| 內閣總理大臣 | 伯爵黑田清隆 |
| 樞密院長 | 伯爵伊藤博文 |
| 外務大臣 | 伯爵大隈重信 |
| 海軍大臣 | 伯爵西鄉從道 |
| 農商務大臣 | 伯爵井上馨 |
| 司法大臣 | 伯爵山田顯義 |
| 大藏大臣兼內務大臣 | 伯爵松方正義 |
| 陸軍大臣 | 伯爵大山巖 |
| 文部大臣 | 子爵森有禮 |
| 遞信大臣 | 子爵榎本武揚 |

衆議院議員撰舉法

第一章 選舉區畫

第一條 衆議院ノ議員ハ各府縣ノ選舉區ニ於テ之ヲ選舉セシム其ノ選舉區及各選舉區ニ於テ選舉スヘキ定員ハ此ノ法律ノ附錄ヲ以テ之ヲ定ム

第二條 府縣知事ハ其府縣ノ選舉區ノ選舉ヲ監督ス
一 選舉區ノ選舉ハ郡長又ハ市長其ノ選舉長トナリ之ヲ管理ス

第三條 一 選舉區ニシテ數郡市ニ涉ルトキハ府縣知事ハ其ノ郡長又ハ市長ノ一人ヲ命ジ選舉長トラシムヘシ

第四條 一市ノ域内ニ於テ數選舉區アルトキハ府縣知事ハ區長ヲシテ其ノ選舉長トラシムヘシ

第五條 選舉ニ關ル費用ハ地方稅ヲ以テ支辨スヘシ

第二章 選舉人ノ資格

第六條 選舉人ハ左ノ資格ヲ備フルコトヲ要ス

第一 日本臣民ノ男子ニシテ年齡滿二十五歲以上ノ者

第二 撰舉人名簿調製ノ期日ヨリ前滿一年以上其ノ府縣内ニ於テ本籍ヲ定メ住居シ仍引續キ住居スル者

第三 選舉人名簿調製ノ期日ヨリ前滿一年以上其ノ府縣内ニ於テ直接國稅十五圓以上ヲ納メ仍引

續キ納ムル者

但シ所得稅ニ付テハ人名簿調製ノ期日ヨリ前

滿三年以上之ヲ納メ仍引續キ納ムル者ニ限ル

第七條 家督ニ由リ財產ヲ相續シタル者ハ其ノ財產ニ

付前產財主ノ納稅額ヲ以テ其ノ納稅資格ニ算入ス

第三章 被選人ノ資格

第八條 被選人タルコトヲ得ル者ハ日本臣民ノ男子滿

三十歲以上ニシテ選舉人名簿調製ノ期日ヨリ前滿一

年以上其ノ選舉府縣内ニ於テ直接國稅十五圓以上ヲ

納メ仍引續キ納ムル者タルヘシ

但シ所得稅ニ付テハ人名簿調製ノ期日ヨリ前滿三年

以上之ヲ納メ仍引續キ納ムル者ニ限ル

第九條 宮内官裁判官會計檢査官收稅官及警察官ハ被

選人タルコトヲ得ス

前項ノ外ノ官吏ハ其ノ職務ニ妨ケサル限ハ議員ト相

兼スルコトヲ得

第十條 府縣及郡ノ官吏ハ其ノ管轄區域内ニ於テ被選

人タルコトヲ得ス

第十一條 選舉ノ管理ニ關係スル市町村ノ吏員ハ其ノ

選舉區ニ於テ被選人タルコトヲ得ス

第十二條 神官及諸宗ノ僧侶又ハ教師ハ被選人タルコ

トヲ得ス

第十三條 府縣會ノ議員ニシテ衆議院ノ議員ニ撰舉セ

ラレ當選ヲ承諾シタルトキハ其ノ前職ヲ辭スヘキモ

ノトス

第四章 選舉人及被選人ニ通スル規定

第十四條 左ノ項ノ一ニ觸ル、者ハ選舉人及被選人ヲ

ルコトヲ得ス

一 瘋癲白癡ノ者

二 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免レサル者

三 公權ヲ剝奪セラレタル者又ハ停止中ノ者

四 禁錮ノ刑ニ處セラレ滿期ノ後又ハ赦免ノ後滿三年ヲ經サル者

五 舊法ニ依リ一年以上ノ懲役若ハ國事犯禁獄ノ刑ニ處セラレ滿期ノ後又ハ赦免ノ後滿三年ヲ經サル者

六 賭博犯ニ由リ處刑ヲ受ケ滿期ノ後又ハ赦免ノ後

滿三年ヲ經サル者

七 撰擧ニ關ル犯罪ニ由リ選舉權及被選權ノ停止中ノ者

第十五條 陸海軍軍人ハ現役中選舉權ヲ行フコトヲ得

ス及被選人タルコトヲ得ス其ノ休職停職ニ在ル者亦同シ

第十六條 華族ノ當主ハ衆議院議員ノ選舉人及被選人タルコトヲ得ス

第十七條 刑事ノ訴ヲ受ケ拘留又ハ保釋中ニ在ル者ハ其ノ裁判確定ニ至ルマテ選舉權ヲ行フコトヲ得ス及被選人タルコトヲ得ス

第五章 選舉人名簿

百五十二

第十八條 選舉長ハ毎年四月一日ヲ期トシ各町村長ヲシテ一ノ投票區域内ニ於テ選舉資格ヲ有スル者ヲ調査シ人名簿二本ヲ調製シ同月二十日マテニ其ノ一本ヲ差出サシムヘシ

選舉人名簿ハ選舉人ノ姓名官位職業身分住所生年月納ムル所ノ直接國稅ノ總額並ニ納稅地ヲ記載スヘシ

第十九條 市ニ於テハ左ノ方法ニ依リ選舉人名簿ヲ調製スヘシ

第一 一市又ハ市内ノ一區ヲ以テ一選舉區ト爲シタル場合ニ於テハ選舉長其ノ人名簿ヲ調製スヘシ

第二 市内ニアル數區ヲ合シテ一選舉區ト爲シタル場合ニ於テハ各區長ヲシテ其ノ區内ノ人名簿ヲ調製シ選舉長ニ差出サシムヘシ

第三 郡市ヲ合シテ一選舉區ト爲シタル場合ニ於テ郡長其ノ選舉長トナリタルトキハ市長ヲシテ其ノ人名簿ヲ調製シ之ヲ差出サシムヘシ

第四 第三ノ場合ニ於テ市長其ノ選舉長トナリタルトキハ市長其ノ市内ノ人名簿ヲ調製スヘシ

第二十條 選舉人其ノ住居スル投票區域ノ外ニ於テ直接國稅ヲ納ムルトキハ納稅地ノ町村長又ハ市長若ハ區長ノ證狀ヲ得テ選舉人名簿調製ノ期日マテニ其ノ投票ヲ管理スル町村長又ハ市長若ハ區長ニ差出スヘシ

百五十三

第二十一條 選舉長ハ各町村長又ハ市長若ハ區長ヨリ
差出シタル選舉人名簿ヲ合シ一選舉區ヲ以テ一冊ト
シ選舉管理ノ郡役所又ハ市役所若ハ區役所ニ備置キ
其ノ副本ヲ府縣知事ニ送致スヘシ

第二十二條 選舉長ハ毎年五月五日ヨリ十五日間一選
舉區選舉人名簿ノ寫ヲ其ノ選舉管理ノ郡役所又ハ市
役所若ハ區役所ニ於テ縱覽セシムヘシ

第二十三條 凡テ選舉資格アル者選舉人名簿ニ於テ人
名ノ脱漏又ハ誤載アルコトヲ發見シタルトキハ其理
由書及證憑ヲ具ヘテ縱覽期限内ニ選舉長ニ申立テ其
ノ改正ヲ求ムルコトヲ得

縱覽期限ヲ經過シタル後前項ノ申立ヲ爲スモ其ノ効
ナシ

第二十四條 選舉長ニ於テ脱漏ノ申立ヲ受ケタルトキ
ハ其ノ理由及證憑ヲ審査シ申立ヲ受ケタル日ヨリ二
十日以内ニ之ヲ判定スヘシ若其ノ申立ヲ以テ正當ナ
リト判定シタルトキハ直ニ其ノ人名ヲ記載シ其ノ由
ヲ當人所在地ノ町村長又ハ市長若ハ區長ニ通知シ併
セテ選舉區内ニ告示スヘシ

第二十五條 選舉長ニ於テ誤載ノ申立ヲ受ケタルトキ
ハ其ノ理由及證憑ヲ審査シ必要ナル場合ニ於テハ申
立人又ハ被告人ヲ召喚審問シ申立ヲ受ケタル日ヨリ
二十日以内ニ之ヲ判定スヘシ若誤載ナリト判定シタ

ルトキハ直ニ之ヲ削除シ其ノ由ヲ被告人所在地ノ町村長又ハ市長若ハ區長ニ通知シ併セテ選舉區内ニ告示スヘシ

第二十六條 申立人又ハ被告人ニ於テ選舉長ノ判定ニ服セサルトキハ選舉長ヲ被告トシ判定ノ日ヨリ七日以内ニ始審裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二十七條 始審裁判所ニ所テ前條ノ訴訟ヲ受取リタルトキハ他ノ訴訟ノ順序ニ拘ラス速ニ其ノ裁判ヲ爲スヘシ

第二十八條 前條ニ於ケル始審裁判所ノ裁判ハ控訴スルコトヲ許サス但シ大審院ニ上告スルコトヲ得

第二十九條 選舉人名簿ハ六月十五日ヲ以テ確定期限

トシ次年ノ調製ノ日マテ之ヲ据置クヘシ但シ裁判官渡書ニ依リ改正スヘキモノハ選舉長ニ於テ其ノ言渡書ヲ受取リタル時ヨリ二十四時内ニ之ヲ改正シ其ノ由ヲ申立人又ハ被告人所在地ノ町村長又ハ市長若ハ區長ニ通知シ併セテ選舉區内ニ告示スヘシ

第六章 選舉ノ期日及投票所

第三十條 選舉ノ投票ハ通常七月一日ニ之ヲ行フ但シ衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ勅令ヲ以テ臨時選舉ノ期日ヲ定メ少クトモ三十日以前ニ公布スヘシ

第三十一條 投票所ハ町村役場又ハ町村長ノ指定シタル場所ニ於テ之ヲ設ケ町村長之ヲ管理ス

第三十二條 一町村ニ於テ選舉人少數ニシテ一ノ投票

所ヲ設クルニ足ラサルトキハ數町村ヲ合併スルコトヲ得

此ノ場合ニ於テハ郡長ハ府縣知事ノ認可ヲ經テ合併ノ町村及投票所並ニ投票所管理ノ町村長ヲ指定スヘシ

第三十三條 町村長ハ其ノ管理スル投票區域内ニ於ケル選舉人中ヨリ立會人二名以上五名以下ヲ定メ邁クトモ選舉ノ期日ヨリ三日以前ニ之ヲ本人ニ通知シ選舉ノ當日投票所ニ參會セシムヘシ
立會人ハ正當ノ事故ナクシテ其ノ職ヲ辭スルコトヲ得ス

第七章 投票

第三十四條 投票ハ午前七時ニ始メ午後六時ニ終ル

第三十五條 投票函ハ二重ノ蓋ヲ造リ二種ノ鑰ヲ設ケ其ノ一ハ町村長之ヲ管守シ其ノ一ハ立會人之ヲ管守スヘシ

第三十六條 町村長ハ投票ノ初ニ當リ立會人ト共ニ參會シタル選舉人ノ面前ニ於テ投票函ヲ開キ其ノ空虛ナルコトヲ示スヘシ

第三十七條 選舉人ハ選舉ノ當日本人自ラ投票所ニ至リ選舉人名簿ノ對照ヲ經テ投票スヘシ

第三十八條 投票用紙ハ各府縣各々一定ノ式ヲ用井選舉ノ當日投票所ニ於テ町村長ヨリ之ヲ各選舉人ニ交付スヘシ

選舉人ハ投票所ニ於テ投票用紙ニ被選人ノ姓名ヲ記載シ次ニ自己ノ姓名住所ヲ記載シテ捺印スヘシ
第三十九條 選舉人ニシテ文字ヲ書スルコト能ハサル由テ申立ツルトキハ町村長ハ吏員ヲシテ代書セシメ之ヲ本人ニ讀ミ聞カセ捺印投票セシメ其ノ由テ投票明細書ニ記載スヘシ

第四十條 二人以上ノ議員ヲ選舉スヘキ選舉區ニ於テハ連名投票ヲ用ヅヘシ
第四十一條 選舉人名簿ニ記載セラレタル者ノ外投票スルコトヲ得ス但シ撰舉人名簿ニ記載セラレヘキ裁判言渡書ヲ所持シ撰舉ノ當日投票所ニ至ル者アルトキハ町村長ハ投票用紙ヲ交付シ投票セシメ其ノ由テ

投票明細書ニ記載スヘシ
第四十二條 投票終ルノ時期ニ至リタルトキハ町村長ハ其ノ由テ告ケ投票函ヲ閉鎖スヘシ投票函閉鎖ノ後ハ總テ投票スルコトヲ許サス
第四十三條 町村長ハ投票明細書ヲ作り投票ニ關ル一切ノ事項ヲ記載シ立會人ト共ニ署名スヘシ
第四十四條 町村長ハ一名又ハ數名ノ立會人ト共ニ投票ノ翌日投票函及投票明細書ヲ併セテ撰舉管理ノ郡役所又ハ市役所若ハ區役所ニ送致スヘシ
第四十五條 一撰舉區内ニアル島嶼ニシテ前條ノ期限内ニ投票函ヲ送致スルコト能ハサル情況アルトキハ府縣知事ハ人名簿確定ノ日ヨリ撰舉ノ期日マテノ間

於テ適宜ニ其ノ投票ノ期日ヲ定メ撰舉會ノ期日ヲ
テニ其ノ投票函ヲ送致セシムルコトヲ得

第八章 撰舉會

第四十六條 撰舉會ハ撰舉管理ノ郡役所又ハ市役所若
ハ區役所ニ於テ之ヲ開ク

第四十七條 撰舉長ハ各投票所ヨリ參會シタル立會人
ノ中ヨリ抽籤ヲ以テ撰舉委員三名以上七名以下ヲ定
ムヘシ

第四十八條 撰舉長ハ投票函送達ノ翌日撰舉委員立會
ノ上各投票函ヲ開キ投票ノ總數ト投票人ノ總數トヲ
計算スヘシ若投票ト投票人トノ總數ニ差異ヲ生シタ
ルトキハ其ノ由ヲ撰舉明細書ニ記載スヘシ

第四十九條 總數ノ計算ヲ終リタルトキハ撰舉長ハ撰
舉委員ト共ニ投票ヲ點檢スヘシ

第五十條 各撰舉區ノ撰舉人ハ其ノ撰舉會ニ參觀ヲ求
ムルコトヲ得

第五十一條 左ニ掲クル投票ハ無効トス

- 一 撰舉人名簿ニ記載ナキ者ノ投票但シ裁判言渡書
ヲ所持シタルニ依リ投票シタル者ハ此ノ限ニ在
ラズ
- 二 成規ノ用紙ヲ用非サルモノ
- 三 撰舉人自己ノ姓名ヲ記載セサルモノ
- 四 資格ナキ被撰人ノ姓名ヲ記載スルモノ但シ連名
投票ニ列記スル人員中資格アル者ニ付テハ其ノ

効アルモノトス
 五 誤字又ハ汚染塗抹毀損ニ依リ記載スル所ノ撰舉人又ハ被撰人ノ姓名ヲ認知スヘカラサルモノ但シ通常ノ假名字ヲ用井又ハ誤字ニ係ルモ明ニ其ノ姓名ヲ認知スルコトヲ得ルモノハ此ノ限ニ在ラス

六 第三十八條第二項ニ規定シタル外他ノ文字ヲ記載シタルモノ但シ被撰人ノ指名ヲ誤ラサル爲ニ其ノ官位職業身分住所ヲ附記シ又ハ敬稱ヲ用井タルモノハ此ノ限ニ在ラス

第五十二條 投票効力ノ有無ニ付疑義アルトキハ撰舉委員ノ意見ヲ聞キ撰舉長之ヲ決定ス此ノ決定ニ對シ

テハ撰舉會場ニ於テ異議ヲ申立ツルコトヲ得ス

第五十三條 無効ノ投票ハ抹線ヲ加ヘ其ノ由ヲ撰舉明細書ニ記載シ一ケ年間保存シ期限ヲ經過シタル後之ヲ燒棄ツヘシ

第五十四條 一投票ニシテ其ノ撰舉スヘキ定員ヨリ多キ被撰人ノ姓名ヲ記載シタルトキハ其ノ定員ニ超エタル人名ヲ末尾ヨリ除却スヘシ

連名投票ニシテ其ノ選舉スヘキ定員ニ足ラサルトキハ現ニ記載シタル者ノミヲ計算スヘシ但シ一人ノ姓名ヲ複記シタル者ハ一人トシテ之ヲ計算スヘシ

第五十五條 投票ハ六十日間郡役所又ハ市役所若ハ區役所ニ保存シ期限ヲ經過シタル後之ヲ燒棄ツヘシ

第五十六條 選舉ニ關リ訴訟又ハ告訴告發アルトキハ
第五十三條第五十五第ノ期限ヲ經過スルモ裁判確定
ニ至ルマテ其ノ投票ヲ保存スヘシ

第五十七條 選舉長ハ選舉明細書ヲ作り選舉點檢ニ關
ル一切ノ事項ヲ記載シ選舉委員ト共ニ署名シ之ヲ保
存スヘシ

第九章 當選人

第五十八條 投票總數ノ最多數ヲ得タル者ハ之ヲ當選
人トス

投票同數ナルトキハ生年月ノ長者ヲ以テ當選人トス
同年月ナルトキハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第五十九條 當選人定マリタルトキハ選舉長ハ直ニ其

ノ姓名及投票ノ數ヲ府縣知事ニ届出ヘシ

第六十條 府縣知事前條ノ届出ヲ受ケタルトキハ各當
選人ニ通知シ其ノ姓名ヲ管内ニ告示スヘシ

第六十一條 當選人當選ノ通知ヲ受ケタルトキハ其ノ
當選ヲ承諾スルヤ否ヲ府縣知事ニ届出ヘシ

第六十二條 一人ニシテ數選舉區ノ當選人トナリタル
者當選ノ通知ヲ受ケタルトキハ何レノ選舉區ノ當選
ヲ承諾スル旨ヲ府縣知事ニ届出ヘシ

第六十三條 當選人其ノ府縣内ニ在ル者ハ十日以内其
ノ府縣外ニ在ル者ハ二十日以内ニ當選承諾ノ届出ヲ

爲サ、ルトキハ其ノ當選ヲ辭シタルモノト見做スヘ
シ

第六十四條 當撰人ニシテ其ノ當撰ヲ辭シ又ハ期限内ニ其ノ當撰ノ承諾ヲ届出サルトキハ府縣知事ハ撰擧ノ期日ヲ定メ其ノ選舉長ニ命シ再ヒ選舉ヲ行ハシムヘシ但シ第五十八條第二項ノ場合ニ於テ抽籤ニ依リ當選ヲ得タル者其ノ當選ヲ辭シ又ハ其ノ承諾ヲ届出サルトキハ抽籤ニ依リ當選ヲ失ヒタル者ヲ以テ當選人ト定ムヘシ

第六十五條 各選舉區ノ當選人確定シタルトキハ府縣知事ハ當選證書ヲ付與シ及管内ニ告示シ並ニ當選人ノ資格ヲ錄シテ内務大臣ニ具申スヘシ

第十章 議員ノ任期及補闕選舉
第六十六條 議員ノ任期ハ四箇年トス但シ任期ヲ終リ

タル後仍選舉ニ應スルコトヲ得

第六十七條 議員ノ闕員アルニ由リ内務大臣ヨリ補闕選舉ヲ開クヘキ旨ヲ命セラレタルトキハ府縣知事ハ其ノ命ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ闕員ノ選舉區ニ限リ臨時撰擧ヲ行ヒ補闕議員ヲ撰擧セシムヘシ

第六十八條 補闕議員ノ任期ハ前議員ノ任期ニ依ル
第十一章 投票所取締

第六十九條 投票管理ノ町村長ハ投票所ノ秩序ヲ保持シ必要ナル場合ニ於テハ警察官吏ノ處分ニ付スルコトヲ得

第七十條 凡テ戎器又ハ兇器ヲ携帯スル者ハ投票所ニ入ルコトヲ許サス

第七十一條 撰舉人ニ非サル者ハ投票所ニ入ルコトヲ許サス

七十二條 投票所ニ於テハ一切ノ演説討論及喧譟ニ涉リ又ハ他人ノ投票ヲ勸誘スルコトヲ禁ス

第七十三條 投票所ニ於テ秩序ヲ紊ル者アルトキハ町村長ハ之ヲ警戒シ其ノ命ニ從ハサルトキハ之ヲ投票所ノ外ニ退出セシムヘシ

第七十四條 投票所ノ外ニ退出セシメタル者ハ犯罪者ヲ除ク外其ノ投票ヲ爲サシムル爲ニ再ヒ投票所ノ内ニ呼入ルコトヲ得

第七十五條 投票所ニ參會シタル撰舉人ニシテ刑法又ハ此ノ法律ノ罰則ヲ犯シタル者ハ投票スルコトヲ禁

シ其ノ姓名事由ヲ投票明細書ニ記載スヘシ

第七十六條 投票ニ關ル異議ノ申立ニ付町村長ノ決定

ニ對シテハ投票所ニ於テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第七十七條 撰舉管理ノ郡役所又ハ市役所若ハ區役所

ニ於テ撰舉會ノ參觀ヲ求ムル者ハ總テ第六十九條ヨ

リ第七十三條ニ至ルマテノ例ニ照シ撰舉長之ヲ處分

スヘシ

第十二章 當撰訴訟

第七十八條 各撰舉區ニ於テ當撰ヲ失ヒタル者當撰人

ノ當撰ヲ無効トスルノ理由アリト認ムルトキハ當撰

人ヲ被告トシ第六十五條ニ掲ケタル當撰人ノ姓名告

示ノ日ヨリ三十日以内ニ控訴院ニ出訴スルコトヲ得

其ノ期限ヲ經過シタル後出訴スルモ其ノ効ナシ
第七十九條 原告人ハ訴訟狀ト共ニ保證金トシテ金三百圓又ハ之ニ相當スル公債證書ヲ控訴院書記局ニ預置クヘシ

第八十條 原告人敗訴ノ場合ニ於テ裁判言渡ノ日ヨリ七日以内ニ一切ノ裁判費用ヲ納完セサルトキハ保證金ヨリ之ヲ控除シ仍足ラサルトキハ之ヲ追徴スヘシ

第八十一條 同一ノ當撰人ニ對シ二人以上ノ原告人訴訟ヲ爲シタルトキハ控訴院ハ一ノ裁判言渡書ヲ以テ各訴訟人ニ宣告スルコトヲ得

第八十二條 審判中衆議院解散ノ命アルトキハ控訴院ハ其ノ訴訟ヲ棄却スヘシ

第八十三條 原告人訴訟ヲ願下クルトキハ同時ニ其ノ由ヲ新聞紙又ハ其ノ他ノ方法ヲ以テ公告スヘシ

第八十四條 控訴院ハ當撰訴訟ヲ審判スルニ當リ本訴ニ關係スル刑法又ハ此ノ法律ノ犯罪者ニ對シ直ニ處刑ノ言渡ヲ爲スコトヲ得但シ此ノ場合ニ於テハ檢察官ヲシテ立會ハシムヘシ

當撰訴訟ニ關係セサル場合ニ於ケル此ノ法律ノ犯罪者ハ所轄刑事裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

第八十五條 控訴院ニ於テ當撰訴訟ヲ判定シタルトキハ其ノ裁判言渡書ノ謄本ヲ内務大臣ニ送付スヘシ若衆議院開會スルトキハ併セテ之ヲ議長ニ送付スヘシ

第八十六條 當撰訴訟ニ付控訴院ノ裁判ニ對シテハ大

審院ニ上告スルコトヲ得

第八十七條 訴訟ノ目的タル當撰人ハ其ノ裁判確定ニ至ルマテ衆議院ニ列席スルノ權ヲ失ハス

第八十八條 當撰訴訟ニ付本章ニ規定シタルモノ、外總テ普通ノ訴訟手續ニ依ル

第十三章 罰則

第八十九條 納税額年齢住所及其ノ他撰舉資格ニ必要ナル事項ヲ詐稱シ撰舉人名簿ニ記載セラレタル者ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第九十條 投票ヲ得又ハ他人ニ投票ヲ得セシメ若ハ他人ノ爲ニ投票ヲ爲スコトヲ抑止スルノ目的ヲ以テ直接又ハ間接ニ金錢物品手形若ハ公私ノ職務ヲ撰舉人

ニ授與シ又ハ授與スルコトヲ約束シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

其ノ授與又ハ約束ヲ受ケタル者亦同シ

第九十一條 直接又ハ間接ニ金錢物品手形若ハ公私ノ職務ヲ撰舉人ニ授與シ又ハ授與スルコトヲ約束シテ投票ヲ得又ハ他人ニ投票ヲ得セシメ若ハ他人ノ爲ニ投票ヲ爲スコトヲ抑止シタル者ハ刑法第二百三十四條ノ例ヲ以テ論ス
其ノ授與又ハ約束ヲ受ケ投票ヲ爲シ又ハ投票ヲ爲ササル者亦同シ

第九十二條 投票ヲ得又ハ他人ニ投票ヲ得セシメ若ハ他人ノ爲ニ投票ヲ爲スコトヲ抑止スルノ目的ヲ以テ

撰舉人ニ暴行ヲ加ヘタル者ハ一月以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第九十三條 撰舉人ニ暴行ヲ加ヘテ投票ヲ得又ハ他人ニ投票ヲ得セシメ若ハ他人ノ爲ニ投票ヲ爲スコトヲ抑止シタル者ハ三月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第九十四條 撰舉人ヲ強逼シ又ハ投票所若ハ撰舉會場ヲ騷擾シ又ハ投票函ヲ扣留毀壞若ハ劫奪スルノ目的ヲ以テ多衆ヲ嘯聚シタル者ハ六月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス
其ノ情ヲ知テ嘯聚ニ應シ勢ヲ助ケタル者ハ十五日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

金ヲ附加ス
犯罪者戎器又ハ兇器ヲ携帯シタルトキハ各々本刑ニ一等ヲ加フ

第九十五條 撰舉ノ際管理者又ハ立會人ニ暴行ヲ加ヘ又ハ暴行ヲ以テ投票所若ハ撰舉會場ヲ騷擾シ又ハ投票函ヲ扣留毀壞若ハ劫奪シタル者ハ四月以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

犯罪者戎器又ハ兇器ヲ携帯シタルトキハ各々本刑ニ一等ヲ加フ
第九十六條 多衆ヲ嘯聚シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ重禁錮ニ處ス

其ノ情ヲ知テ嘯聚ニ應シ勢ヲ助ケタル者ハ二年以上
五年以下ノ輕禁錮ニ處ス
犯罪者戎器又ハ兇器ヲ携帶シタルトキハ各々本刑ニ
一等ヲ加フ

第九十七條 演說又ハ新聞紙若ハ其ノ他ノ文書ヲ以テ
人ヲ教唆シ前三條ノ罪ヲ犯サシメタル者ハ刑法第百
五條ノ例ニ依ル其ノ教唆ノ効ナキ者モ仍本刑ニ二等
又ハ三等ヲ減シ處斷ス

第九十八條 戎器又ハ兇器ヲ携帶シテ投票所若ハ選舉
會場ニ入りタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處
ス

第九十九條 當撰人ニ於テ第八十九條ヨリ第九十八條
ニ至ルマテノ刑ニ處セラレタルトキハ其ノ當撰ハ無
効トス

第一百條 他人ノ姓名ヲ詐稱シテ投票ヲ爲シタル者及第
十四條ニ依リ撰舉人タルコトヲ得サル者投票ヲ爲シ
タルトキハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第一百一條 前數條ノ罪ヲ犯シ禁錮以上ノ刑ニ處セラレ
又ハ再ヒ罰金ノ刑ニ處セラレタル者ハ三年以上七年
以下撰舉權及被撰權ヲ停止ス

第一百二條 立會人正當ノ事故ナクシテ此ノ法律ニ規定
シタル義務ヲ缺クトキハ五圓以上五十圓以下ノ罰金
ニ處ス

第一百三條 本章ニ規定シタル罰則ノ外刑法ニ正條アル

モノハ各々其ノ條ニ依リ重キニ從テ處斷ス

第四百四條 凡テ撰舉ニ關ル犯罪ハ六箇月ヲ以テ期滿免
除トス

第四百五條 此ノ罰則ハ第十一章ノ各條ト共ニ投票所及
撰舉會場ニ貼示スヘシ

第十四條 補則

第四百六條 市ニ於テハ一市ニ一ノ投票所ヲ設ケ此ノ法
律ニ規定シタル投票及撰舉ノ管理ハ市長兼テ之ヲ掌
ルヘシ

第四百條ノ場合ニ於テハ一撰舉區ニ一ノ投票所ヲ設ケ
此ノ法律ニ規定シタル投票及撰舉ノ管理ハ區長兼テ
之ヲ掌ルヘシ

第四百七條 前條ノ場合ニ於テハ市長又ハ區長ハ其ノ管
理スル撰舉區内ニ於ケル撰舉人中ヨリ立會人三名以
上七名以下ヲ定メ通シトモ撰舉ノ期日ヨリ三日以前
ニ之ヲ本人ニ通知シ撰舉ノ當日撰舉管理ノ市役所又
ハ區役所ニ參會セシムヘシ
立會人ハ投票ニ立會ヒ併セテ投票ヲ點檢スヘシ
此ノ場合ニ於ケル撰舉明細書ハ併セテ投票ノ事項ヲ
記載スヘシ

第四百八條 島司ヲ置ク地方ニ於テハ此ノ法律ニ規定シ
タル撰舉長ノ職務ハ島司之ヲ掌ルヘシ

第四百九條 町村制ヲ施行セサル町村ニ於テハ此ノ法律
ニ規定シタル町村長ノ職務ハ戶長之ヲ掌ルヘシ

第一百十條 撰舉人名簿調製ノ初年ニ限り所得税法施行以來第六條第八條ニ規定シタル納稅額ヲ引續キ納完シタル者ハ其ノ納稅資格ノ期限ニ充ツルモノト見做スヘシ

第一百十一條 北海道沖繩縣及小笠原島ニ於テハ將來一般ノ地方制度ヲ準行スルノ時ニ至ルマテ此ノ法律ヲ施行セス

衆議院議員撰舉法附錄

東京府

議員總數十二人

第一區	麩町區 赤坂區	一人	第六區	淺草區	一人
第二區	芝區	一人	第七區	神田區	一人
第三區	京橋區	一人	第八區	下谷區 本郷區	一人
第四區	日本橋區	一人	第九區	小石川區 牛込區 四谷區	一人
第五區	本所區 深川區	一人	第十區	東多摩郡 南豐島郡 北豐島郡	一人